

2025年度
JICA
教師海外研修
(教育行政コース)
報告書



発行

独立行政法人 国際協力機構 (JICA)

広報部 地球ひろば推進課

TEL:03-3269-9022

〒162-8433 東京都新宿区市谷本村町10-5 JICA市ヶ谷ビル

編集

JICA地球ひろば - 教員向け研修運営事務局

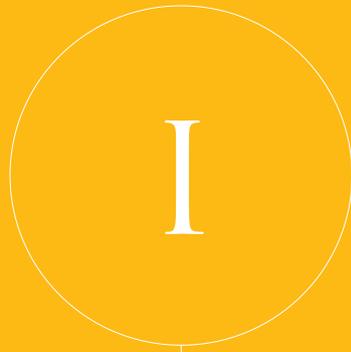
一般社団法人 グローバル教育推進プロジェクト(GiFT)

TEL:03-4577-6767 Email:jica-edu@j-gift.org

〒108-0014 東京都港区芝5丁目26-24 田町スクエア2F

目次

	事業概要	・04
	参加者・運営関係者	・07
	研修スケジュール	・09
	海外研修視察レポート	・20
	参加者レポート	・37
	ファシリテーター所感	・83
	付録	・87



事業概要

1. 背景

国際協力機構(JICA)は日本の政府開発援助(ODA)を一元的に行う実施機関であり、約150の国・地域で国際協力を展開している。日本国内においては、これら国際協力を通じて得た知見を生かし、「持続可能な社会の創り手」の育成を目指す学習指導要領などの学校教育の動向を踏まえ、「教師海外研修」「エッセイコンテスト」「施設訪問」「出前講座」「開発教育メールマガジン」「開発教育教材作成」など、国際理解教育/開発教育を支援する様々な事業を行っている。本研修は日本のODAによる開発教育支援事業の一環として、全国の小中高校・特別支援学校等の児童・生徒への国際理解教育/開発教育を継続的に推進する学校管理職(校長・教頭)および教育行政関係者を対象に実施している。

2. 目的

本研修は、上記の背景を踏まえ、実際に途上国を訪問し、JICAが実施している教育支援や事業について学び、知見を深めることにより、学校および地域で児童・生徒に対する国際理解教育/開発教育を継続的に推進するためのスクールリーダーの能力強化を目的としている。また、参加者同士の意見交換や協働作業を通して、研修終了後も本研修で培われた教員ネットワークを活用し、各地域の学校教育関係者と共にさらなる国際理解教育/開発教育の推進を図ることを目指している。

3. 研修日程・会場

事前研修(オンライン)	2025年6月21日(土) 11:00-12:00	オンライン
事前研修(対面)	2025年6月27日(金) 9:30-18:00	会場: JICA市ヶ谷ビル
出発前オリエンテーション	2025年7月15日(火) 17:00-18:30	オンライン
海外研修	2025年7月26日(土)～8月1日(金) 6泊7日	派遣国: パプアニューギニア
事後研修	2025年8月22日(金) 9:30-18:00	会場: JICA市ヶ谷ビル
報告会	2025年9月10日(水) 18:30-20:00	オンライン

4. 主な内容

事前研修(オンライン)

- JICA事業概要、開発教育概要説明
- 海外旅行保険について
- 安全管理について

事前研修(対面)

- 研修の目的とプログラム全体の流れ
- 国際理解教育/開発教育推進についてのダイアログ
- パプアニューギニアにおけるJICAの取り組み
- 講義・ワークショップ
- 現地訪問先での発表の準備 など

出発前オリエンテーション

- 出発日の集合時間等について
- 現地情報・安全管理について
- 訪問先での発表に向けた準備状況の共有
- 質疑応答

事後研修

- 海外研修の振り返り
- 国際理解教育/開発教育推進についてのダイアログ
- 講義・ワークショップ
- 報告会に向けての準備

海外研修

- 在パプアニューギニア日本国大使館表敬訪問
- JICAパプアニューギニア事務所訪問
- 教育関係のプロジェクトサイト視察
- 現地で活動するJICAボランティアの活動視察
- 現地学校関係者等との意見交換
- 振り返り など

報告会

- 海外研修の経験、知見の共有
- 国際理解教育/開発教育の推進について

5. 実施体制

- 主催 : 独立行政法人 国際協力機構 (JICA) 広報部地球ひろば推進課
 運営事務局 : 一般社団法人 グローバル教育推進プロジェクト (GiFT)
 (JICA地球ひろば・教員向け研修運営事務局)

6. 参加資格

以下の①または②のいずれかに該当するとともに、③～⑧を満たす方。

- ①小・中・高校、特別支援学校等の校長・教頭職の方。(主幹教諭を含む)
- ②都道府県・市区町村の教育委員会(教育センターを含む)の指導主事の方。
- ③過去にJICA教師海外研修(教育行政コース)への参加経験が無く、本研修の趣旨・目的を十分理解し、上記研修プログラムの全日程に参加できること。
- ④オンライン会議ツール(Zoomを想定)を用いた研修に対応可能であること。(パソコン、インターネットに接続できる環境など)
- ⑤本研修を通じて得られた学び・成果を所属先及び各地域の教育委員会、各種教員ネットワーク(研究会、勉強会等)の場において積極的に共有・紹介する意欲のあること。
- ⑥研修参加後、学校現場や各地域の教育委員会等において、JICA国内拠点や各県所在のJICAデスク(国際協力推進員)等と連携・協力しながら、国際理解教育/開発教育を継続的に普及・促進する意欲のあること。
- ⑦研修参加後2年間、国際理解教育/開発教育推進のための自身の取り組みに関する報告書をJICAへ提出すること。(年1回:形式自由)
- ⑧本研修参加後に、学校現場や各地域の教育委員会等で国際理解教育/開発教育を継続的に実践・推進するのに十分な勤続年数あるいは活動の場を有すること。

II

参加者・
運営関係者

参加者(10名)

都道府県	名前	所属	職名
北海道	口岩 竜馬	江別市立中央小学校	主幹教諭
岩手県	菊地 桂子	一関市立藤沢小学校	校長
東京都	笠井 淳子	稲城市立稲城第五中学校	副校長
愛知県	稲田 恒久	豊橋市立磯辺小学校	校長
愛知県	杉浦 繁	西尾市立佐久島しおさい学校	教頭
奈良県	大西 敏之	奈良市立大安寺西小学校	校長
大阪府	北谷 晃久	大阪市教育委員会事務局 指導部	指導主事
広島県	平田 俊彦	広島県立芦品まなび学園高等学校	教頭
宮崎県	小川 隆弘	宮崎第一高校	主幹教諭(進学指導部長)
宮崎県	山崎 香織	宮崎県立日南くろしお支援学校	主幹教諭/高等部主事

主催 独立行政法人 国際協力機構(JICA)

名前	職名
川淵 貴代	JICA広報部長・JICA地球ひろば 所長
植田 茜*	JICA広報部 地球ひろば推進課 課長
安元 孝史*	JICA広報部 地球ひろば推進課 課長補佐
長瀬 良太	JICAパプアニューギニア事務所

*海外研修同行者

運営事務局 一般社団法人 グローバル教育推進プロジェクト(GiFT)

名前	職名
木村 大輔*	理事・GiFTダイバーシティファシリテーター
忍 頼子	GiFTグローバル教育プロデューサー
佐藤 さとみ	GiFTグローバル教育プロデューサー

*海外研修同行者



研修スケジュール

事前研修 2025年6月27日(金) 9:30-18:00 会場: JICA市ヶ谷ビル

時間	プログラム
9:30	【開会】主催挨拶 JICA広報部長 川淵 貴代
9:40	【導入】教師海外研修とは?事前研修のねらい JICA広報部地球ひろば推進課 課長 植田 茜
10:00	【アイスブレイク】自己紹介 ファシリテーション: GiFT 木村 大輔
10:45	休憩
11:00	【説明】海外研修について(安全管理含む) JICA広報部地球ひろば推進課 課長補佐 安元 孝史
11:20	【ダイアログ】今、この時代に、国際理解教育や開発教育を推進する意味や重要性とは何か ファシリテーション: GiFT 木村 大輔
12:00	昼食
12:50	地球ひろば見学
13:30	【講義】パプアニューギニア独立国事業概要 JICAパプアニューギニア事務所 前田 大志・林 研吾
14:00	【講義】パプアニューギニアにおけるJICAの取り組み(教育関係) JICA人間開発部基礎教育グループ 基礎教育第一チーム 鈴木 萌
14:35	休憩
14:45	【ワークショップ】パプアニューギニアでゼロから学校をつくるとしたらどんな学校をつくるか? 国立教育政策研究所 初等中等教育研究部長 白水 始 氏
16:15	【訪問先での発表準備】担当グループ分け・内容検討 ファシリテーション: GiFT 木村 大輔
17:05	休憩
17:10	【事前研修振り返り】 ファシリテーション: GiFT 木村 大輔
17:35	【閉会】主催挨拶 JICA広報部地球ひろば推進課 課長 植田 茜
17:30	【渡航に関する説明・事務連絡等】



【ダイアログ】今、この時代に国際理解教育や開発教育を推進する意味や重要性とは何か



【講義】バブアニューギニアにおけるJICAの取り組み(教育関係)



【ワークショップ】バブアニューギニアでゼロから学校をつくるとしたらどんな学校をつくるか？(講師：白水 始氏)



集合写真

出発前オリエンテーション 2025年7月15日(火) 17:00-18:30 オンライン

開始

プログラム

17:05

出発日の集合時間等について
現地情報・安全管理について
訪問先での発表について(進捗共有)
質疑応答

JICA広報部地球ひろば推進課 課長補佐 安元 孝史
JICAバブアニューギニア事務所 長瀬 良太
運営事務局(GIFT) 忍 頼子

海外研修 2025年7月26日(土)~8月1日(金) 6泊7日 派遣国:パプアニューギニア

【Day 1】 7月26日(土)

12:30	羽田空港集合
15:05	マニラ ニノイ・アキノ国際空港へ向けて出発(フィリピン航空PR421)
18:45	マニラ ニノイ・アキノ国際空港着

【Day 2】 7月27日(日)

0:10	マニラ ニノイ・アキノ国際空港発(フィリピン航空PR215)
8:05	ポートモレスビー・ジャクソン国際空港着、ホテルへ移動、チェックイン
11:30	昼食
15:00	ホテルにて発表の準備
18:30	夕食&1日の振り返り

【Day 3】 7月28日(月)

9:00	JICAパプアニューギニア事務所訪問 ・所長挨拶(松岡秀明所長)・パプアニューギニアでのJICA事業についての説明
10:30	在パプアニューギニア日本国大使館表敬訪問
11:30	昼食
13:00	パプアニューギニア教育省訪問 ・パプアニューギニアの教育に関する概要説明(木田光二教育政策アドバイザー) ・教育省 副次官に挨拶 ・参加者による発表 ・意見交換
15:30	国立教育メディアセンター訪問 ・センター長への挨拶 ・国立教育メディアセンター概要説明(伊藤明德専門家) ・意見交換
18:30	夕食&1日の振り返り



JICAパプアニューギニア事務所訪問



在パプアニューギニア日本国大使館表敬訪問



パプアニューギニア教育省訪問



国立教育メディアセンター訪問

[Day 4] 7月29日(火)

- | | |
|------------|---|
| 9:00-14:00 | ソゲリ小学校・ソゲリ高等学校訪問
・ソゲリ小学校校長への挨拶
・内山翔太隊員(青少年活動)、戸高将隊員(小学校教育)の活動見学
・授業参観 ・日本を訪問した生徒および引率教員による成果発表会
・参加者による発表 ・意見交換 |
| 15:00 | JICAパプアニューギニア事務所にて振り返り |
| 18:30 | 夕食&1日の振り返り |



生徒による歓迎



教員のみなさんと共に

[Day 5] 7月30日(水)

- | | |
|-------|--|
| 9:30 | 下水処理施設訪問
・ポートモレスビー下水道整備事業の概要説明 ・下水処理施設見学 |
| 12:30 | 昼食 |
| 14:00 | 教員養成校(Sacred Heart Teachers' College/Bomana教員養成校)訪問
・校長への挨拶 ・初等理科教科教員養成校強化プロジェクトの概要説明
・参加者による発表 ・学生および教員との意見交換 |
| 18:30 | 夕食&1日の振り返り |

海外研修 2025年7月26日(土)~8月1日(金) 6泊7日 派遣国:パプアニューギニア



下水処理施設訪問



教員養成校訪問

[Day 6] 7月31日(木)

- 9:30 バルニ廃棄物最終処分場訪問
・職員からの説明および意見交換 ・処分場見学
- 10:45 パプアニューギニア国立美術博物館訪問
- 11:45 昼食
- 13:00 JICAパプアニューギニア事務所訪問
・海外研修の報告 ・振り返り
- 18:00 夕食

III
研修
スケ
ジュ
ール



バルニ廃棄物最終処分場訪問



パプアニューギニア国立美術博物館訪問



JICAパプアニューギニア事務所にて研修の報告



【Day 7】 8月1日(金)

5:30	ポートモレスビー・ジャクソン国際空港発へ移動、チェックイン
10:30	マニラ ニノイ・アキノ国際空港へ向けて出発(フィリピン航空PR 216)
14:30/15:30	マニラ ニノイ・アキノ国際空港着/発(フィリピン航空PR 432)
21:00	成田国際空港到着→検疫・入館・税関→解散

事後研修 2025年8月22日(金) 9:30-18:00 会場: JICA市ヶ谷ビル

時間	プログラム
9:30	【開会】主催挨拶 JICA広報部地球ひろば推進課 課長 植田 茜
9:40	【アイスブレイク】チェックイン ファシリテーション: GiFT木村 大輔
10:10	休憩
10:20	【ワークショップ】海外研修のふりかえり(個人としての学びや視点の変化) ファシリテーション: GiFT木村 大輔
10:55	休憩
11:00	【ワークショップ】国際理解教育/開発教育とは何を理解・教育すればよいのか? 国立教育政策研究所 初等中等教育研究部長 白水 始 氏
12:00	昼食
13:00	【ダイアログ】海外研修の経験を踏まえて、これからのアクションを考える ファシリテーション: GiFT木村 大輔
14:15	休憩
14:25	【報告会準備】構成・内容についてのダイアログ グループごとの準備
17:30	【事後研修の振り返り】 ファシリテーション: GiFT木村 大輔
18:00	【閉会】



【ダイアログ】
海外研修を通じての自身の変化について共有する



【ダイアログ】
これからのアクションについて考えを共有する



【ワークショップ】
グループダイアログ



【ワークショップ】
グループダイアログ



【ワークショップ】
グループで話したことを全体に共有する



【報告会準備】
発表内容の共有

報告会 2025年9月10日(水) 18:30-20:30 オンライン

テーマ: 海外から学ぶこれからの教育

時間	プログラム・内容
18:30	<p>【開会】主催挨拶 JICA広報部地球ひろば推進課 課長 植田 茜</p>
18:40	<p>【報告発表】 進行: 平田 俊彦</p> <ul style="list-style-type: none"> ●海外研修概要説明 口岩 竜馬・小川 隆弘・山崎 香織 ●海外研修からの気づき、学びと、そこから考える国際理解教育や開発教育の意義・価値、さらには現地地帯抱いたモヤモヤ、そして日本へ持ち帰った問い 杉浦 繁・大西 敏之・菊地 桂子 ●研修を通して得られた学びをさらに深め、今後の教育実践や学校経営にどうつなげていくか 稲田 恒久・笠井 淳子・北谷 晃久 ●質疑応答
19:55	<p>【講評】 国立教育政策研究所 初等中等教育研究部長 白水 始 氏</p>
18:00	<p>【JICAからのお知らせ】 JICA広報部地球ひろば推進課 課長補佐 安元 孝史</p>

III
研
修
ス
ケ
ジ
ユ
ー
ル



2025年度 JICA教師海外研修(教育行政コース)

パプアニューギニア研修 オンライン報告会

2025年 9月 10日(水) 18:30-20:00

発表プログラムと発表者

司会：広島県立芦品まなび学園高等学校 教頭 平田 俊彦

【第1部 パプアニューギニアの概要と、教育行政コースの研修内容】

宮崎県 宮崎第一高等学校	主幹教諭(進学指導部長)	小川 隆弘
宮崎県立日南くろしお支援学校	主幹教諭/高等部主事	山崎 香織
北海道 江別市立中央小学校	主幹教諭	口岩 竜馬

【第2部 教師海外研修から得られた気づきや学び、そこから考える国際理解教育や開発教育の意義や価値、現地で抱いたモヤモヤ、日本へ持ち帰った問い】

愛知県 西尾市立佐久島しおさい学校	教頭	杉浦 繁
奈良県 奈良市立大安寺西小学校	校長	大西 敏之
岩手県 一関市立藤沢小学校	校長	菊地 桂子

* 質疑応答 (第1部&第2部)

【第3部 研修を通して得られた学びをさらに深め、今後の教育実践や学校経営にどうつなげていくか】

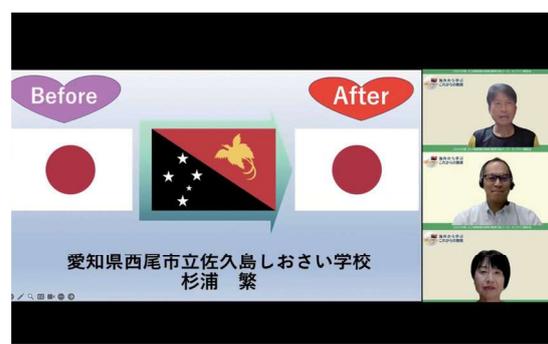
愛知県 豊橋市立磯辺小学校	校長	稲田 偉久
東京都 稲城市立稲城第五中学校	副校長	笠井 淳子
大阪府 大阪市教育委員会事務局	指導部 指導主事	北谷 晃久

* 質疑応答 (第3部)

発表プログラムと発表者紹介



海外研修訪問先概要説明



海外研修で得た学びについて



今後の取り組みについて



発表者集合写真



海外研修視察レポート

訪問先：JICAパプアニューギニア事務所

訪問日：2025年7月28日（月） 記録担当：平田 俊彦

松岡秀明所長より、JICAのパプアニューギニアにおける事業についてご講話をいただいた。パプアニューギニアは1975年に独立し、本年で独立50周年を迎える。日本は独立の前年から経済協力を開始しており、長年にわたり信頼関係を築いてきた。パプアニューギニアに在留する外国人は、豪州約1万人、フィリピン約2万5千人、中国約2万人であるのに対し、日本人はわずか116名（2024年10月）にとどまっている。また、中国系スーパーなど、小売業における中国系資本の存在感が印象に残った。

パプアニューギニアの主要産業であるLNG（液化天然ガス）は2014年から生産が始まり、輸出の約半分が日本向けであるほか、マグロ・銅・コーヒー・木材など多くの資源も日本に輸出されていることを新たに学んだ。近年は首脳同士の相互訪問も活発であり、両国関係は政治・経済の両面で一層深まっている。一方、東日本大震災の際には、パプアニューギニアの高校生や教員らが自発的に義援金を募り、「助けてくれた日本に恩返しを」と支援活動を行った事実心に心を打たれた。有意義な時間を過ごすことができ、ODAの意義をあらためて実感する機会となった。



JICA職員との意見交換

松岡秀明所長によるパプアニューギニアにおけるJICA事業の説明



訪問先：在パプアニューギニア日本国大使館

訪問日：2025年7月28日（月） 記録担当：杉浦 繁

JICA事務所は宿泊先から少し離れた場所にあったが、日本大使館は近く、塀や警備が整った厳重な雰囲気の中で迎えられた。広い部屋に通され、日本茶でもてなされたとき、日本人としての誇りを感じ、大使館ならではの心配りに触れたように思った。

望月寿信大使からは、赴任の経緯や最近の交流の様子を伺った。ジェームズ・マラペ首相の訪日、ソゲリ小学校の児童の来日、大阪万博でのパプアニューギニアデーなど、つながりが広がっていることを知った。ポートモレスビーの街には物があふれ、人は優しく、戦時中の出来事があったにもかかわらず、強い反日感情はなく、むしろ日本人に親しみを持っていると聞き胸を打たれた。

田中二等書記官からは、ワントクという部族社会の存在、治安や縁故採用の問題、農業に従事する人の多さや貧困率の高さなど、国の現実を率直に聞くことができた。一方で、日本のODAによって漁業交渉での優遇や親日感情が育まれていることも分かり、日本の取り組みの確かさを実感した。

今回の訪問を通じ、パプアニューギニアには多くの課題があるが、人々の幸せのために日本ができることはまだあると感じた。自分は日本の子どもたちのために働く立場だが、この経験をきっかけにパプアニューギニアの未来にも少しでも役立ちたいと思うようになった。



訪問先：パプアニューギニア教育省

訪問日：2025年7月28日(月) 記録担当：菊地 桂子

教育省を訪問し、日本の教育制度、理科教育における縦軸連携の重視、ならびに教科書とICT活用について紹介するプレゼンテーションを行った。教育省の担当者からは、日本の理数教育の水準の高さについて問われ、学びのスパイラル構造や低学年からの体験学習、教師研修の充実が背景にあることを説明した。教員に指導力の課題が認められる場合は、研修を通じて改善を図る仕組みがあることを伝えた。また、教育水準の地域差についての質問もあった。これについては、全国共通の学習指導要領に基づいて教科書が作成され、その教科書を使って授業が実施されているので、地域での教育水準の大きな差は生じていないと回答した。

研修参加者から、子どもたちが早い段階から英語を学ぶことによるアイデンティティ形成に及ぼす影響について質問をしたところ、アイデンティティを形成する要素は言語だけではない。例えば、入れ墨などの各部族が有する文化的要素も重要であるとの回答があった。

木田光二教育政策アドバイザーからは、教育政策の長期目標は人的資本開発にある。経済成長と社会発展の基盤として教育を位置付けていること、教育センターは義務教育の無償化や識字率向上を目指していることが説明された。教育省への訪問を通じて、パプアニューギニアにおいても日本と同様に、幸せな未来を作るためには、「人づくり」が重要であると考えていることを感じた。また、幼児教育の重要性も認識されており、教育管理システムが機能して現状を的確に把握し、ドナーと教育省とのパートナーシップがさらに進展することが重要であると学んだ。



日本の教育について紹介

木田光二教育政策
アドバイザーからの説明

訪問先：国立教育メディアセンター

訪問日：2025年7月28日（月） 記録担当：大西 敏之

メディアセンター所長のハチ・ミロー氏、第一次官補のデミ・マクス氏、初等理数科教員養成校強化プロジェクト総括の伊藤明德氏、そしてアイ・シー・ネット株式会社の安川奈々恵氏から、それぞれ国立教育メディアセンターでの取り組みや基礎教育理数科技術協力プロジェクトについて紹介があった。

メディアセンターにはeカリキュラム部門とマルチメディア制作部門があり、ラジオやテレビ番組、オンライン・オフラインの教育プログラムを作成している。また、テキスト、コンピューター、ラジオ、テレビなど多様な手法を用いて教育の推進や授業改革に取り組んでいるとのことであった。

質疑応答では、ラジオプログラムは一時中断されているものの、幼児教育向けの新しいプログラムが開発中であり、心の教育はクリスチャンエデュケーションに委ねられていることが分かった。さらに、都市部の高校生はスマートフォンを持っている一方で、小学生はあまり持っておらず、各校へのLAN整備も十分でないことが指摘されたが、地方の教員はスマートフォンを活用して授業資料を受け取っているとのことだった。



伊東明德専門家からのプロジェクトの説明



参加者からの活発な質問と意見交換

訪問先:ソゲリ小学校・ソゲリ高等学校

訪問日:2025年7月29日(火) 記録担当:笠井 淳子

授業見学

学校に到着すると、ジョージ校長先生をはじめとする約20名の先生と全校児童・生徒約530名が、温かい笑顔と素敵な歌、フラワーシャワーで私たちを迎えてくれた。まず、マイハ先生とJICA海外協力隊の内山翔太隊員の理科の授業を見学した。電気について、教科書を基に授業を展開し、実物を使いながら児童の興味を引き出し、彼らが体験を通じて理解を深め、自らの考えをまとめられるよう工夫されていた。次に、戸高将隊員の算数の授業を見学した。8桁の数について、millionやthousandを用いた数字の読み方から始まり、不等号や4桁の足し算・引き算に至るまで、これまでの学習内容を基に子どもたちが「できた!わかった!」と実感できるよう、スモールステップを大切に授業が進められていた。二つのクラスを見学して最も印象的だったのは、子どもたちの元気な声や、目を輝かせて学習に懸命に取り組む姿であった。



実物に触れながら考える授業



笑顔で学ぶ生徒たち

校舎見学

二つの班に分かれ、内山隊員と戸高隊員に校舎を案内していただいた。どこを回っていても、たとえグラウンドであっても、子どもたちの元気な声が終始聞こえていた。同行してくださったJICAバプアニューギニア事務所ボランティア調整員の武藤功さんによれば、二人の隊員が来たことで学校が活気づき、外部の方からも同様の意見が寄せられているとのことだった。校長室は、かつて図書室だった部屋を職員全員が集まれるよう改装したそうだ。教員用の連絡掲示板や出勤簿など、日本の職員室に近い機能も備えていた。

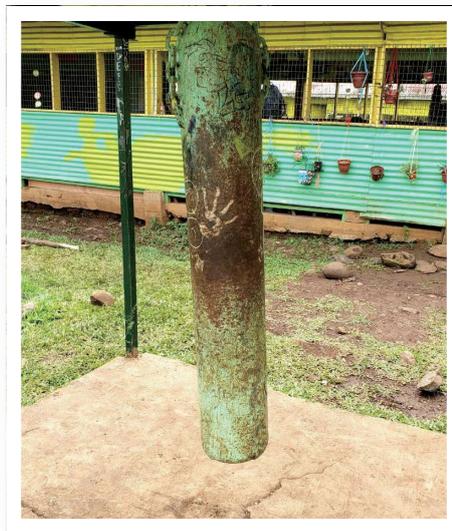
バプアニューギニアの先生方による授業が行われている教室も見学させていただいた。教室には、バツタやカエルの一生など、子どもたちがまとめたものや図工で描いた絵などの作品が飾られており、子どもたちの学習の成果を見ることができた。

校内には水飲み場と手洗い場がそれぞれ一か所ずつ設けられており、雨水タンクは手洗い用として活用されていた。チャイムは大きなガスボンベが活用されており、トイレは児童・生徒と教員が一か所を共用している。グラウンドは芝が刈られ、子どもたちが遊びやすいよう配慮されていた。さらに、校庭沿いには川が流れており、子どもたちが泳ぐ場所となるとともに、学校に住む教員がシャワー代わりに利用している。

訪問先:ソゲリ小学校・ソゲリ高等学校



教室には児童の作品などが多く掲示されている



チャイムとして使われるガスボンベ

ソゲリ高校

ソゲリ高校はパプアニューギニアに8校ある、優秀な生徒を集めた国立高等専門学校の一つである。生徒たちは寮に住み、勉学に励んでいる。教育設備も充実しており、エアコンの設置やグループ学習に適した机などが整っていた。生徒が誇りを持って学習に取り組む様子が伝わってきた。

まず、日本語の授業を見学した。日本から派遣された日本語教師の笹瀬正樹さん(元海外協力隊員)が授業を担当していた。生徒たちが日本語でのあいさつや歌で出迎えてくれた。その後、私たちも加わったグループに分かれ、用意された曜日カードと行動を示すカードを基に、「私は～に～ました」を使った文作りや会話練習に取り組んだ。また、STEM選抜クラスとして、1学年6クラスのうち2クラスを特別選抜クラスとし、国の指定校としてSTEM教育に力を入れた取り組みを行っていた。



カードを使って日本語を学ぶ高校生



日本語テキストと学習ノート

訪日した教師・子どもたちによる発表

7月に日本を訪問してきたばかりのマイハ先生(5年担任)と、6名の子どもたちによるプレゼンテーションを聞くことができた。大使館や学校訪問、観光、ホームステイを通じて考えたこと、感じたことを、それぞれの視点から発表してくれた。どの内容も、二つの国の違いについて様々な角度から考えさせられるもので、日本での経験が充実したものであったことがよく伝わってきた。日本語で挨拶や自己紹介をしてくれた子どももいた。

◆関連記事「子どもたちが踏み出した一歩 日本での経験が未来を変える」JICA

https://www.jica.go.jp/overseas/png/information/press/2025/1572183_58033.html

① マイハ先生の発表内容

駐日パプアニューギニア大使館では、奨学金をもらって日本で学ぶ先輩から子どもたちが話を聞く機会があった。パプアニューギニアと日本の長年の友好関係の上に留学が成り立っていることを学び、今後も両国の友好関係を大切に必要性を感じた。また、万博ナショナルデーでは、日本との外交関係50周年の歴史に触れた。小学校での交流では、姉妹校提携のある大阪市立加美北小学校や、奈良市立ならやま小学校で2年生の児童が名産のお茶を入れてくれたことなどを通して、温かい交流を経験した。さらに、日本の生活文化として、どこにでもあるコンビニや自販機により、食べたいときや飲みたいときにいつでも物を手に入れられることや、時間を非常に意識して行動する日本人の姿が印象的だった。加えて、ホテルやお店に警備員がないことに驚くとともに、日本の安全性の高さも実感した。

② 子どもたちの発表内容

日本の小学校での温かいおもてなしや給食の体験(時間の長さ、エプロンの着用、トレイの使用、学校による給食手配など)について紹介された。また、町の美しさやごみの管理についても触れ、ゴミ箱へ捨てる習慣や、ゴミ箱がない場合は自宅に持ち帰ることなど、日本の環境意識の高さに気づいたことが伝えられた。さらに、日本の安全さや景観の美しさ、警備員や警察官がほとんどお店にいないことにも驚いたようだ。また、大阪城での様々な体験や、日本にはお寺が多くあることなど、観光も楽しんだことや、ホームステイでは料理や入浴、ゲームをしたことなどについて、楽しそうに発表してくれた。



マイハ先生による小学校訪問についての発表



内山翔太隊員と日本を訪問した児童による発表

訪問先:ソゲリ小学校・ソゲリ高等学校

協力隊員のお二人による報告

翌週に任期を終える二人から、これまでの取り組みの内容や、取り組みに当たって大切にしてきたことについて発表があった。発表では、多くの写真も示され、見学だけでは分からない学校や先生、子どもたちの姿、彼らの実際の暮らしについて知ることができた。うまくいかないこともある中で、試行錯誤を繰り返しながら、ソゲリ小学校という環境の中でできることに果敢に挑戦したこと、その成果が非常によく伝わってきた。

①内山隊員の報告内容

STARの視点を大切にしてい取り組んできた。取り組みを具体化する際には、関係するすべての人(日本、JICA、学校、自分)の思いが重なるところを意識して事業を進めることで、様々なサポートを得やすくなることを実感している。

●Sustainability (持続可能性)

環境教育(プラスチックに関する授業、アートマイル、ソゲリ高校の図書を活用した調べ学習・国際コンテストへの応募)

<https://artmile.jp/wp-content/uploads/2024/12/267dabd906d0314cc06e754338d11d2d.jpg>

●Together (一緒に)

校外学習(処分場や動物園)、清掃活動など、実生活に結び付けた学習

●Action

夢を形にする活動として、日本語の交流(20回)や、日本への渡航資金獲得のためのカレー販売(収入63,000円)を実施。日本を訪問した際の子どもたちの物怖じしない姿からも、その成果がよく分かる。

●Relationship

日本とパプアニューギニアの関係を意識した活動として、アートマイル国際共同プロジェクトや万博国際交流プログラムを実施(日本への訪問だけでなく、訪問する前からクリスマスカードの交換や、Zoomを活用した交流、日本食体験など)。

②戸高隊員の報告内容

●ソゲリ小学校での取り組みは、算数の授業改善による学力向上と、教員研修の充実の二点を中心に進められた。

●算数の授業改善については、ペットボトルの蓋など具体物の活用や、棒グラフなどによる視覚化を取り入れ、子どもたちに実際に操作させることで、内容の理解が深まるよう工夫した。

●教員研修については、当初7月に学習指導案を作成し研究授業を実施する予定であったが、目標とするレベルには到達できなかった。教員の現状を踏まえ、まず教科書の基本的な内容を理解してもらうことが重要と考え、身長から長さの概念を理解するなど、基礎的な取り組みを行った。

研修参加者による発表・協議

日本の学校の取り組みを紹介したのち、小グループで共通点や相違点についてディスカッションを行った。国は異なるものの、課題として共通する点を共有できたことは、非常に貴重な機会であった。また、昨日までの研修で「算数(数学)に課題がある」と言葉だけで聞いていた内容について、実際にどのような状況であるのか、そしてその課題に対してどのようなアプローチが可能かを意見交換できたことも、大変有意義であった。



日本の学校についての紹介



ソゲリ小学校教員との
意見交換



訪問先：JICAパプアニューギニア事務所（中間振り返り）

訪問日：7月29日（火）

海外研修の中間振り返りの時間を設け、以下のような気づきや思いが共有された。

- 初めて途上国を訪れ、大きな衝撃を受けた。キラキラした目で授業を受ける子どもたちの姿を肌で感じたが、設備が十分でないことも目の当たりにした。一方、日本の生活を考えると、幸せとは何かを考えさせられる。グループセッションで出会った先生の子どもは障がいを抱えており、「ぜひあなたにここで教えてほしい」と言われたが、その子は学校に来ていなかった。きっと部族の「ワントク」で守られているのだろう。ワントクにより、親亡き後も安心して過ごすことはできるが、子どもたちの学習の保障について考えると複雑な気持ちになった。現地でしか感じられないことを肌で感じた1日だった。
- YouTubeでは色々見ることができる。実際に自分が旅をしなくても、経験者の話を聞く（見る）ので十分ではないかと思っている部分もあった。しかし、パプアニューギニアを訪問して実際に経験し、パプアニューギニアの先生の話も直接聞いた。彼らの本音がぶつかる場面も見た。実際にどこかへ行き、その人たちから直接話を聞くことがいかに重要かを実感した。これからも問いをもち続け、パプアニューギニアへの関心も持ち続けながら考えていきたい。
- 20年前のことを思い出しながら参加していた。挨拶の指導がなくても、子どもたちが自発的に笑顔で接してくれる様子に、価値観の違いを強く感じた。何が幸せかという出発点が日本と全く異なる。自殺者が年間2万人にのぼる日本に対し、パプアニューギニアでは自殺者が少ないと推測される。日本語教師の笹瀬正樹さん（元海外協力隊員）は、パプアニューギニアで感じている価値観が好きで、長期的に滞在する意向を持っているようだった。今後、日本とパプアニューギニアの高校同士の交流を行いたいとの希望も持っていて、その積極的な姿勢が非常に印象的であった。
- 日本の子どもたちは情報にあふれ、生き方を見失いがちだ。ソゲリ小学校の子どもたちを見て、彼らは自分の将来をどのように見つめているのだろうかと考えた。現状の生活に満足しているのかもしれない。中には何かを乗り越えたいと思っている人もいるだろうが、人の幸せって何だろうと考える。日本では自分らしさを出せない子どもや不登校の子どももいて、色々なプレッシャーを感じている。その一方で、ソゲリの子どもたちはプレッシャーをあまり感じていないように見えた。この点についてさらに考えていきたい。
- 現地に来ると色々楽しくなる一方で、冷静に見て考えたいと思った。子どもたちは幸せそうで、日本の子どもたちも同じだ。教師のトップダウン・ボトムアップの構造も似ている。パプアニューギニアの先生たちは教育の方向性や子どもたちの将来像の認識が十分に合致していないのではないだろうかと感じた。
- ソゲリ小学校では、机が老朽化した環境の中で子どもたちが授業を受けていた。ソゲリ高校の設備の充実と比べると、小学校との間に大きな差があることを実感した。小学4年生の教室では、寄付によって整えられた机がしっかりしていたが、パプアニューギニアの教育環境について考えさせられた。建物自体は簡素であっても、子どもたちが安心して学べる環境をどう整えていくかは、子どもたちを大事にすることにつながることもあった。

- 治安の悪さや男尊女卑の問題点、教育省でのお話を踏まえ、実際に学校を訪れた。子どもたちの笑顔を見ることができうれしかった。先生たちは統率が取れていないと言っていたが、集団下校ではきれいに並んでいた。また、女性の地位は高くはないとのことであったが、グループ活動では女性の先生がリードしていたし、メディアセンターのスタッフや校長も女性であった。戸高さんの話によれば、最初は日本流で頑張っていたが、この国にはこの国のやり方があり、それでも教育はある意味成り立っている。私たちは自分たちの経験に基づいた方法で教育を考えてしまうけれど、そこについても考え直す必要があるのではないかと感じた。
- 自分が持っている価値観にあらためて気づくことができた。学校という範囲だけで子どもの教育を考えると、教育の目的を見失いがちだが、途上国に来ると、社会を成り立たせ維持するためには人が重要であり、そのために教育も重要であると考えさせられた。
- 昨日の時点では様々な課題を感じたが、国がもっと牽引していく必要があると感じた。実際にパプアニューギニアの教育現場を訪問して思ったのは、幸せとは何か、大事にしたい価値観とは何かということだ。今の生活に十分満足している一方で、ソゲリ小学校のように、先生たちが子どもたちを十分に育てきれない状況も目の当たりにした。教育はどこを目指すべきなのか。子どもたちの目を見ると学ぶ意欲が違ふと感じ、この違いは何だろうと考えさせられた。
- ODAの重要性を実感した。日本人ファーストという言葉があるが、まずは地球市民という視点を持つことが大切だ。地球市民という視点を知ったうえで、それぞれが考えて行動することが大事。しかし、今、どれだけ地球全体の視点で物事を考えられているだろうか。○をつけてもらうだけであんなに喜んでくれる子どもたちの姿を見て、忘れていた感覚を思い出した。日本の教師の働き方や幸せについて、パプアニューギニアの先生の働き方を見て、あらためて考えさせられた。

訪問先：下水処理施設

日時：2025年7月30日（水） 記録担当：稲田 恒久

ポートモレスビー下水整備事業について、主に当施設のスーパーバイザーであるアンザック氏から説明を受けた。当初はTVモニターを使用して説明いただく予定で準備されていたが、機器の不具合により口頭での説明となった。それでも、わかりやすく丁寧に説明していただいた。

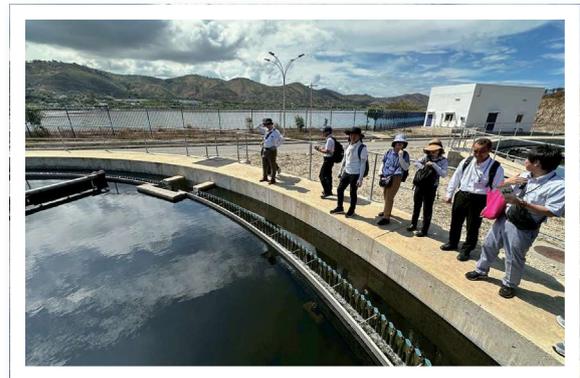
本事業はJICAの円借款による支援により、2010年に借款契約が締結され、市内13か所のポンプ場・配管が整備され、下水処理施設は2020年から稼働している。これにより、処理水が流れ込む海岸付近の海水は、検出される大腸菌の数値が大幅に改善され、その効果が明確に示されたとのことである。

この施設に流入する汚水には生活排水に加えて雨水も含まれるため、ペットボトルやプラスチックなどの分解されないごみが石や泥とともに大量に流れ込むことが課題の一つとなっている。最初にそうしたごみを除去し、次の水槽で空気を混入させ、微生物の活性化によって有機物を沈殿処理する。この工程は日本の下水処理場でも一般的に行われているものである。見た目は汚水の色をしていたが、水槽に近づいても匂いを感じることはなかった。続く水槽では、微生物による処理水が円形的水槽に送られ、オーバーフローした水が最終的に紫外線で殺菌され、浄化された水として海へ放流される。私の知る日本の下水処理場に比べると工程が少なく、よりハイテクな施設のように思われた。しかしその分、この施設を維持・管理できる人材の育成も課題となっているとのことであった。

下水処理施設の見学を終え、帰路の途中で「きれいになった」とされる海や海岸を目にすることができたが、同時に海岸に打ち寄せられるごみの多さも実感した。下水パイプの拡張を含めた下水処理事業の維持・拡大を進めるとともに、下水処理や環境保全に関する理解促進の必要性を強く感じた。



下水処理施設にて職員から説明を受ける



下水処理施設見学



水質改善が進んだ海で獲れた魚が並ぶ

訪問先: 教員養成校 (Sacred Heart Teachers' College/Bomana 教員養成校)

日時: 2025年7月30日(水) 記録担当: 北谷 晃久

学校に着くと、思わず感動する出来事があった。学生から花の首飾りやうちわをいただいたのである。温かい歓迎から始まり、期待が膨らむ中で、いくつかの授業を見学させていただいた。生徒たちが真剣に先生の話聞きながら学んでいる姿が印象的であった。参観した各教室では、自己紹介をする機会を設けていただき、結果的に4回自己紹介を行った。また、授業時間の一部を割いていただき、生徒たちと一緒に遊んだり、授業後には集合写真を撮ったりと、充実した時間を過ごすことができた。生徒たちの話を聞く姿勢や純真な反応など、日本の子どもたちとは異なる姿を見ることができ、非常に貴重な機会となった。

続いて先生たちとの情報交換や発表の時間となり、まずは自己紹介をしてお互いを知るところから始まった。日本に行ったことのある教員が何名かいたことや、「教育に関わる者はみんな同僚だ」と言っていただけは、とても嬉しかった。

私たちからの発表では、コミュニティ・スクールや防災教育について紹介した。途中にはワークも取り入れ、大変盛り上がった。パプアニューギニアでも近年、大雨により子どもが亡くなる事故が発生していることから、防災教育への関心が高いことがうかがえた。また、体験学習の導入や、教科以外の教育の必要性を感じていることについても話があった。パプアニューギニアでこれから求められていく教育のあり方にも触れられ、示唆に富む有意義な機会となった。



防災教育についての発表



教員養成校の学生と共に



防災シミュレーションワーク

訪問先：バルニ廃棄物最終処分場

日時：2025年7月31日(木) 記録担当：口岩 竜馬

ついに研修も最終日を迎えた。いつもの見慣れたロビーでの集合風景も、この日ばかりはどこか寂しさがこみ上げてきた。バルニ廃棄物最終処分場に到着し、作業する男たちに迎えられてゲートを通ると、巨大なショットガンを携えた警備員の姿があった。かつて経験したことのないような物々しさに圧倒される中、職員による施設の説明が始まった。

バルニ廃棄物最終処分場はJICAの支援を受け、準好気性埋立構造である「福岡方式」を採用しており、廃棄物を効率的かつ適切に処理している。2016年の稼働開始以来、首都ポートモレスビーでは廃棄物管理計画が策定され、それに基づいたごみ収集・運搬率が60%未満から70%以上へと改善された。現在はフェーズ3に入り、施設の拡張・改善や地方都市への展開、さらにはリサイクル計画や有価物分別の取り組みへと移行しているとのことであった。

処分場には巨大なパイプがそびえ立ち、そこから酸素を取り入れることで浄化槽のような役割も果たしている。そのため、ごみ処分場特有の臭いはほとんど感じられなかった。職員は「このシステムはまるで人間が呼吸をしているようだ」と話していた。しかし、実際に“生きていた”のはパイプだけではなかった。ごみの山そのものが、別の意味で生きていたのである。ここでは「ウェストピッカー」と呼ばれる人々が廃棄物の中から有価物を回収し、それを糧に生計を立てており、絶え間なく働きながら懸命に生きているのだ。もちろん、その労働・生活環境は危険かつ過酷である。先日でもウェストピッカー同士の争いや処分場への無断侵入事件が発生しており、厳重な警備はその暮らしの厳しさを象徴していた。

一方で、そうした現実とは無関係に、ごみの山の頂上では5歳ほどの無邪気な子どもたちが、腰を振りながら楽しそうに踊っていた。彼らの生活環境をどう改善するのか。より公平な社会システムをどう構築するのか。私たち一人ひとりが様々な想いを胸に抱きながら、バスはついに最後の見学地へと向かった。



バルニ廃棄物最終処分場



訪問先：パプアニューギニア国立美術博物館

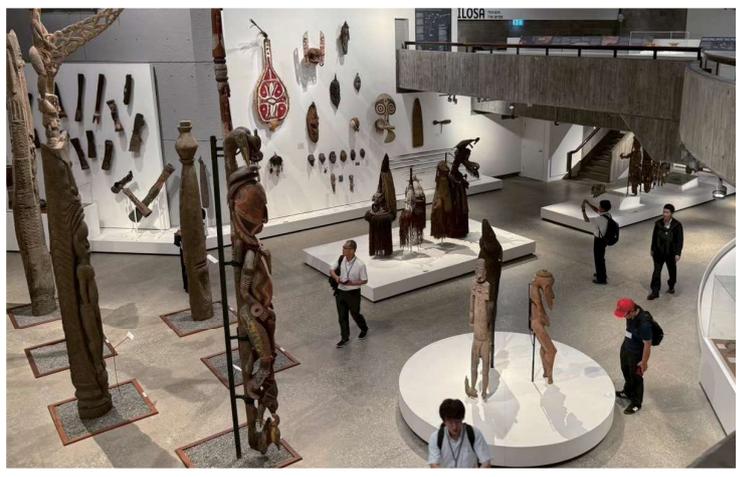
日時：2025年7月31日（木） 記録担当：小川 隆弘

JICAパプアニューギニア事務所の手配により、無事に博物館へ入館することができた。館内は一階が主にパプアニューギニアの歴史や文化に関する展示、二階が主に第二次世界大戦に関する展示という構成になっていた。

入館してまず目をひいたのは、数多くの木彫りのオブジェであった。人形、動物、マスク、楽器など、南洋の国を連想させる色合いや形象で非常に親しみやすい。特に人形は、今にも笑い出しそうなユーモラスな表情や、愚痴を言いそうな苦虫を噛み潰したような表情をしており、非常に生き生きとしている。これにより、パプアニューギニアの文化水準の高さを感じた。ハリウッド映画でも似たような描写はあるが、パプアニューギニアのこの博物館でも、夜になったらオブジェが動き出していたずらをしたり、陽気に騒ぎ回ったりするのではないかと想像してしまうほどであった。また、日本の能面が静謐な精神性を感じさせるのに対し、パプアニューギニアのマスクは陽性のエネルギーに満ち、豊かな生のメッセージを内包しているように感じられた。同じ仮面でも、その表情には大きな違いがあることが印象に残った。

二階には第二次世界大戦に関する資料が展示されており、日本軍やオーストラリア軍に翻弄されながらも、パプアニューギニアの人々が悲劇的な時代をどのように乗り越えてきたかが、軍服や銃器などの戦後遺物とともに分かりやすく示されていた。なお、撃墜された山本五十六が搭乗していた機体のドアの残骸も展示されていた。

この博物館は、展示説明が最小限であることやエアコンが効いていないことなど改善点もあるが、それらを補って余りある豊富で貴重な収蔵品をゆっくり鑑賞できた。研修の最後の訪問先として、非常に充実した素晴らしい時間となった。



多種多様な木彫りやオブジェが展示されている館内



パプアニューギニアにおける第二次世界大戦の歴史(年表)

訪問先：JICAパプアニューギニア事務所（再訪問）

日時：2025年7月31日（木） 記録担当：山崎 香織

7月28日から始まったパプアニューギニアでの教師海外研修の報告および振り返りを行った。まず、松岡所長や白水氏、長瀬氏の同席のもと、参加者はこの海外研修を通して各自が感じたことなどを報告した。その後、6月の事前研修でも扱った課題「ゼロから学校を作るには？」に立ち返り、この1週間での様々な経験や、モヤモヤも含めて感じたことを共有した。また、パプアニューギニアでの経験を踏まえた今ならどのような学校を作りたいか、についてのアイデアを自由に出し合った。アイデアの共有は、実現可能かどうかに関わらず、理想の学校について自由に意見を出すことを目的として行った。

最後に、理想の学校を作る過程で国際理解教育や開発教育をどのように取り入れるかを考え、種まきとしてできることや、現時点ではまだ実施が難しいことも含めて議論した。

グループ①

今回の自分たちの経験（視点や内容を含む）を子どもたちに伝える。何を感じたか、何に驚いたか、何に感動したかを具体的に共有する。その際、JICA職員の仕事の内容も紹介するとよい。JICAが行っている事業の内容だけでなく、職員の皆さんのコミュニケーション能力、調整力、課題解決能力などを伝えることで、子どもたちにとって生き方のロールモデルとなる可能性がある。

グループ②

オンラインで海外とつながり、子どもたちに海外の様子を伝える際、子どもたちはどうしても「きれいな（模範的な）答え」を出そうとする。それだけでなく、疑問点や気づいた点、いわゆる「モヤモヤ」を残すことも大切である。また、相手の意見を否定しない「訓練」も必要であり、多文化共生について意見交換を行いながら議論する経験を積むことが重要である。

グループ③

国際理解教育は多くの場合、総合的な学習の時間に位置づけられているが、どうしても単発の内容になりがちである。週1回の授業でも子どもたちに何かを感じてもらうために、地域資源を活用してALTにルーツを話してもらい、地域に在住する外国人を招く、大学生（留学生）との交流、海外協力隊OBに話を聞くなどの取り組みが考えられる。これにより、子どもたちに海外への興味を持たせると同時に、国際理解教育を通して主体性を引き出すことができる。

今回考えた内容は、今後の事後研修やレポート作成、さらには各自の学校における国際理解教育・開発教育の実践に活かしていく予定である。



海外研修の報告を終えて松岡所長と共に



今後に向けてのアイデア



参加者レポート

氏名	所属	職名	担当業務
口岩 竜馬	江別市立中央小学校	主幹教諭	教頭業務補佐・特別支援コーディネーター等

1. 研修を通して考えた「今の時代に、学校教育において国際理解教育/開発教育を推進する意味や重要性」

戦争や紛争、経済的混乱に加え環境問題など2030年SDGs終了の年まで残りわずかだが、課題はいまだに山積みの状況にあると感じる。その中で、地球規模の課題にどれだけ子どもたちの意識を向けることができるか、それが学校における国際理解教育の課題であると考えます。

現在の日本では目の前の暮らしに精一杯で地球規模の課題など考える余裕などない状態にある。果たしてODAにどれだけの意味を見出せるのか?という状況は否めない。しかし、地球は根底であり、それが崩れれば目の前の暮らしなどあつという間に崩れていくのは自明の理である。世界中の国々が複雑に絡み合い、助け合い、また牽制しあいながらも均衡を保たなければ世界経済など簡単に崩壊してしまうであろう。現在の状況を踏まえ、これまで以上に「他者を理解し、共に生きる力」が子どもたちに必要になってくる。

国際理解教育では「違いを受け入れる・認め合う」を学習で行うことがあるが、これは国際理解に限らず、現在の日本においても重要であると感じる。多様性は国の違いではなく、もう家庭の時代といっても過言ではないだろう。様々な情報や物が容易に手に入る世の中では、隣の家はもう別文化と言って良いほどである。パプアニューギニアの人たちの生活を見て、文化の違いに驚くこともあったが、「同じ」を見つけ、「違い」を受け入れ、そして楽しむことが大切なのではないかと思う。

また、パプアニューギニアの人たちの優しさはこれまでのNGOの働きや関わってきた日本の方々のお陰だと強く感じた。戦時中には侵攻までしている国が、国民を挙げて震災時には3億円もの寄付を送ってくれることはなかなかないだろう。文化は違えど、共に生きる。

地球規模の課題と言っても、その地球を作っているのは一人一人の自分である。自分が地球の市民としてどのように生きていくか、視野を広げることこそ、地球を救うのかもしれないと感じた研修であった。

2. これからの学校経営方針やビジョンに国際理解教育/開発教育をどのように統合できるか。また自治体が設置している教育基本計画や方針の達成に向けて、国際理解教育/開発教育がどのように貢献できるか。

①学校経営方針・ビジョンにおいて、国際理解教育/開発教育をどのように位置付けるか。

- もしも、新しく作成するのであれば別であるが、大体の学校では「～な子」という学校目標が打ち出されているのではないだろうか。これまでの経験から、「SDGsを中心に据えた～」や「国際理解教育を根底においた～」は、数年で形骸化しているのをよく見る。そうではなく、学校経営に関わるものが自分自身の根底に「地球市民の意識」を持つことがまずは最優先であると感じる。無理に位置付けるよりはそれが自然に流れる位置付けがよい。
- では具体的にどのような経営方針かという、大体の学校は「地域に貢献できる子」または私の都道府県であれば「北海道に根付いた学習」や「北の大地を切り開く子」などの経営方針をよく見る。難しいことではなく、そこにさらに「地球規模に、グローバルに活躍できる子ども」を育てることに、学校経営者が腹を括ることだと思う。

②学校経営目標やビジョンを達成するための国際理解教育/開発教育の取り組み(行事・授業・課外活動など)

- 国語などでも一つの文に対しての意見交換などよく行うが、広げていくとまずはクラス内、そして隣のクラスと、学年の枠を超えて、さらにはZoomなどでの他校との交流、それを地球規模にすると外国のクラスとの交流につながられる。意識の差だけで、同じ意見交流でも世界とつながる可能性を秘めていることは教員でも意識していくことである。
- 同時刻となると様々な壁が生じる場合が多いが、動画の交換であれば比較的容易にできる。それを日常的に続けていくと、今度は児童の方から「実際に話してみたい」などの次段階が生まれるようになる。ソゲリ小学校の生徒たちが日本の小学校を訪問したのも、まずはアートプロジェクトから始まったと聞いた。一つの小さな活動から大きな活動につなげていくことも大切な手法の一つであると思う。

③国際理解教育/開発教育を継続的に推進するための学校運営や教職員育成・研修等(次の世代にどのようにバトンをつなぐか?という視点も含めて)

- やはり、ハードルが高いように感じている教員も多く、そんなの無理ですよと思っている教員は実際に多い。しかし、近くの誰かが行っている実践についてはかなり壁が低くなる。実際に自校でもこれまで自分自身が実践してきた授業をやってみたいという教員や、JICA研修員の訪問事業も、ぜひうちの学年でやりたいのでノウハウを教えてほしいと教員も増えてきた。まずは、誰でもチャレンジできる、そして子どもたちのキラキラした目を誘う実践を多く残すことが大切である。
- しかし、その一方で今日的課題である教師の働き方や負担減も考慮しなければならない。特別な授業はもちろん魅力的ではあるが、誰かにしかできない特別な授業だけではなく、誰でも取り組めて効果の大きい汎用性の高い授業・教材の開発も求められている。
- そして最も重要なのは、教師自身が「楽しい」ということである。どんなに素晴らしい授業を行ったとしても、その授業者が疲労困憊、日々に追われている様子を見れば誰も真似したいとは思わないだろう・・・(たとえ本当はどんなに大変だったとしても)生き生きと国際理解に携わり、働く姿が後輩を動かすのだろうと考えている。

3. 国際理解教育/開発教育推進のために、これから取り組みたいこと

- 9月 石狩教育研究会国際理解部会での研修報告
- 11月 稚内国際理解教育研究会 教員向け研修での授業実践
- 校内 研修での発表、若手の研修会参加への後押し(次年度 教師海外研修希望者2名)

4. 今後、JICA国内拠点や都道府県のJICAデスク(国際協力推進員)、その他外部機関と一緒に取り組みたいこと

- 海外からの教師や児童の受け入れ(学校での受け入れやホームステイ、スタディツアー等)
- 共同アートプロジェクトや、清掃活動の動画交換、算数など同じ問題での国際対決等
- 北海道での海外研修を受けたあとのネットワーク作り(これまではD-netの活動としてかなり受け入れ態勢と事前研修などを行ってきたが、コロナ以後曖昧になっているため)

5. 本研修を踏まえて行った報告会や情報共有について

- 異文化交流プログラム 6年生 事前指導(異文化と触れ合う時に)
- 職員研修 海外研修報告会(江別市立中央小学校)
- 特別支援学級 総合的な学習「地球船 宇宙号」の学習
- 11月21日 稚内国際理解教育研究会にて 教員向け研修会開催
- 1月 教職員向け 北海道開発教育ネットワーク ウィンターセミナー開催

6. 所感・今後のビジョン

事前研修のために久しぶりに訪れた東京。深夜東京の12時30分、地下鉄に乗り人を見ていた。私以外、ほぼ全の方が外国籍であろう一つの車両の空間に、誰もがマイノリティーになる可能性を秘めていると強く感じた。

私の住む北海道・札幌は観光客も多く、海外の方が街に多くいる光景には慣れていたはずだった。しかし東京での「その」経験は私にとっては衝撃的なもので、これまでさんざん「国際理解教育が」とうたってきたはずなのに、47歳にしてあらためて真の国際理解教育とは何だろう?と考えざるを得なくなってしまった。「五十近くにして感う」である。百聞は一見に如かず。画面を開けば百聞どころか、「無限の間」があふれるこの時代「一見」こそ次の一手なのかもしれない。

教育行政コースの教師海外研修ということで、自分は場違いだったらどうしようか?・・・そう思いながら参加した事前研修だったが、結果としては47歳にしてこれ以上ない出逢いを頂いたと感じている。素晴らしいファシリテーションのおかげで、私たちが考えていること、子どもに向けて・教員に対しての想い、今の教育業界のこと、「あ、同じことを考えている!」という経験が蓄積されていき、事後の研修の最後の最後まで、熱い想いがあふれ出る研修だったと今振り返っても感じる。

そんな素晴らしいメンバーで臨んだパプアニューギニア、誰もが「とりあえず無事で帰ってきて」と話すほどの事前情報で、万博行きを延期されてさぞかし父を恨んでいるであろう息子でさえ、「本当に気をつけてね・・・」と見送ってくれる国、パプアニューギニア。やはり実際にその空気に触れ、現地の人と話してみないと真実は分からないであろう。百聞は一見に如かず。危険な部分は確かにあるが、JICAの方、現地の方に本当に親身になってサポートして頂いたおかげで、安全に、多分普通の旅行では知ることのできないパプアニューギニアのことを知ることができた。そしてそれは、「返さなければならない」自分の使命でもあるように感じた。

今から12年前、参加した教師海外研修(一般コース)で訪問したフィリピン。そこで出会ったスモークマウンテンに住む子どもたちと、私の人生を変えてくれた恩師。幸いなことに12年間、色々な国際理解教育の機会をもらうことができた。そして今年度より主幹教諭となり、後ろを振り返った時、ついてきてくれて、同じ道を歩んでみたいという若い教員たちがいてくれる。これほど嬉しいことはない。何か一步を踏み出す時、「今度はパプアニューギニアメンバーが背中についている」という言葉が一時、事後研修で話題に出てきたが、これほど青臭い管理職集団もなかなかいないであろう(笑)。でもこのメンバーに巡り合えて幸せだ。

もしも、この報告を読んだ方で教師海外研修を受けたことのない方は、ぜひ一步を踏み出してほしい。目の前の子どもたちとあなた自身が変わる研修だと思う。(管理職の先生、目の前の先生も変わるかもしれない。)

今後のビジョンとしては、これまでの活動とは少し趣向を変え、新たな形での研修企画を進めてみたい。まず、教育委員会との連携のもと、夏季・冬季に管理職を対象とした国際理解セミナーを開催したい。テーマは「管理職でも、授業してみませんか?~全校集会などで役立つ!ちょっと授業に近づく管理職の在り方~」とし、管理職が授業実践の視点を取り入れることで、学校全体の国際理解教育の推進につなげていくことを目指す。

次に、教師海外研修の経験者と連携してスタディツアーの開催を計画したい。第1回目はスリランカを予定し、現地での学びや交流を通して、教師自身の国際的視野を広げる機会としたい。

さらに、「教師海外研修reboot」の企画にも取り組みたい。教師海外研修の過去の参加者から「もう一度現地に行くことができれば、より充実した授業がづくりができる」という声も多く聞く。私自身も再びラバウルを訪れたいという思いがあり、こうした声を踏まえて、再訪型の研修ツアーの企画・運営をしてみたい。

氏名	所属	職名	担当業務
菊地 桂子	一関市立藤沢小学校	校長	学校運営全般

1. 研修を通して考えた「今の時代に、学校教育において国際理解教育/開発教育を推進する意味や重要性」

ウェルビーイングな未来を築くために、教育の力の可能性について考えさせられた。今回、視察したソゲリ小学校では、学びに向かう子どもたちの瞳が、キラキラと輝いていた。人間は誰もが学ぶ意欲をもち、学ぶ楽しさを感じることができる。そして、子どもたちが未来を変えていく力をもっていると強く感じた。その一方、バルニ廃棄物最終処分場で暮らす子どもたちも忘れられない。知識としてもってはいたものの、現実を目の当たりにして、自分に何ができるのかを本気で考えたいと思う瞬間であった。この事実を、日本の子どもたちに伝え、今の生活が当たり前ではないことを考えさせたいとも思った。しかし、日本は子どもの自殺が増加しているが、自給自足でストレスが少ないパプアニューギニアでは、子どもの自殺は聞いたことがないという。ウェルビーイングな未来を築くために、私たちはどのような教育を進めていけばよいのかという問いをもった。

日本は、パプアニューギニアから液化天然ガス、原油、マグロ、コーヒー、木材、金、銅を輸入している。地下資源においては、ほぼ全てを輸入に頼る日本。また、日本の食料自給率は38%。日本国内の6割以上を輸入に頼っている現状がある。今後、異常気象や天候不順、国際情勢などの何らかの理由で外国からの輸入が途絶えてしまったら、危機的な状況に陥る現実を子どもたちも理解する必要がある。また、日本の人口減少にともない、海外からの労働者が増加し、学校における外国人児童生徒も増加している。子どもたちが、様々な国の人々と働く未来が予想できる。日本国内での多様化の進行も感じる昨今であるが、今後、多様化は更に進んでいく。

パプアニューギニアは、世界中で最も言語の豊富な国と言われ、英語とビジン語を公用語としながらも、部族の数だけ言語が存在するという。その数は、800以上とされている。「仲間でないのは敵」と部族間の争いも起こっている。それだけに、部族内での団結力は強い。日本では、人間関係の希薄化が進んでいると感じる。東日本大震災の際、パプアニューギニアの人々はチャリティーでお金を集め、3億円の資金援助を行っている。教員養成校では、英語で感謝を伝えるという機会をいただいたのも貴重な体験となった。

これからの社会を担う子どもたちに、地球市民として考えられる広い視野をもたせたい。他国のことに興味・関心をもつことがその第一歩だと考える。世界には、紛争や感染症、気候変動など答えが見えない地球規模の課題が山積している。ソゲリ小学校では、JICA海外協力隊員がごみの3R（リユース、リユーズ、リサイクル）を現地の教員や子どもたちに教え、取り組んでいた。道路にゴミが散在していたが、ポイ捨てが当たり前の環境で育ってきた子どもたちは、ペットボトルも土に戻らと思っていただけという。道路に散在しているごみを掃除している人も見た。ごみを廃棄処分場に運ぶ車も見た。ODAの功績は大きい。ポートモレスビー下水道整備事業により放流汚水のBOD濃度が190mg/lから5mg/l未満に改善し、魚市場ではたくさんの魚介類が並べられていた。世界の海はつながっている。あらゆる課題を解決するためには、人との違いを認め合い、協力して前進していく力が必須であると思う。そのためにも、国際理解教育/開発教育は非常に重要だと考える。コミュニケーション能力、主体性、レジリエンス、自己肯定感など非認知能力を高める効果も期待できる。

国交樹立50周年という記念の年に、パプアニューギニアを視察する機会をいただいたことは本当に意義深かった。平均寿命66歳、貧困率39%（1日1.9ドル未満で生活している人口の割合）のパプアニューギニア。「教育に関わる者はみな同僚」「いろいろな立場の人に想いをはせる」という言葉を現地でいただいた。この言葉を大切に、教育に取り組んでいきたい。

2. これからの学校経営方針やビジョンに国際理解教育/開発教育をどのように統合できるか。また自治体が設置している教育基本計画や方針の達成に向けて、国際理解教育/開発教育がどのように貢献できるか。

①学校経営方針・ビジョンにおいて、国際理解教育/開発教育をどのように位置付けるか。

- これまで「みんなちがって みんないい」(金子みすゞ)を学校経営の柱に据えて進めてきた。自分を大切にすることは、周りの人も大切にできる。学校全体でポジティブな言葉を大切にしたり、児童の活躍の場・主体的に考え行動する場を計画的に設定したり、特別活動で講師を招聘したりと児童の自己肯定感を高めてきた。そして、夢や目標をもてる児童に育成するために、先輩の姿を行事だけではなく授業という学びの場も参観させたり、コミュニティスクールの推進により人から学ぶ場を大切にしたりしている。みんなにとって、楽しい学校にするための決まりを考えさせ、児童会活動を中心に推進することで、人権意識の向上に努めてきた。更に視野を広げたい思いで、JICA市ヶ谷にある地球ひろばの紹介を全校集会で行った。その後、児童が主体的にSDGsについて発表する活動へとつながった。「みんなちがって みんないい」の言葉の意味をもっとグローバルな視点で捉え、教育計画に加えていきたい。
- 今年度、校長会代表として、市の教育振興計画の策定委員を務めている。そこでも、国際理解教育/開発教育を推進する方策を検討し、提案していきたい。

②学校経営目標やビジョンを達成するための国際理解教育/開発教育の取り組み(行事・授業・課外活動など)

- 全校集会で児童に今回の研修を伝えたり、海外生活の経験のある方々の話を聴いたりする場を設定し、子どもたちの視野を広げ、地球市民としてどのように行動すればよいのか考えられる児童に育成していきたい。
- 職員の意識改革が重要である。今回の研修を職員に伝える際、これからの社会について、子どもたちに必要な資質・能力を考える時間を持ち、総合的な学習の時間・国際理解教育・キャリア教育などを見直し、来年度の計画の位置付けを具体的に検討したい。職員の意識改革が行われることで、各教科の授業の工夫・改善も期待できると考える。個別最適化の観点から、児童に選択、自己決定させることの重要性はだいぶ浸透してきたものの、協働的な学びが十分とは言えない状況が見られる。学習内容が多いため、計画通りに進めようと、児童に任せられず、教師の言葉が多く、誘導するような教え込みの授業がまだまだ多いのが実態である。課題解決に向けて、解決策を協働で考えていく協働的な学びへの授業改善が行われることで、身近なことから海外のことまで、現状と課題を知り、解決策を考え、自ら行動する主体性を育む教育「開発教育」の推進にもつながると考える。
- JICAや一関市国際交流会と連携し、他国籍の児童と交流する活動を展開していきたい。
- 外国語活動や外国語の授業においてALTを活用したり、環境教育(展示物・掲示物)や図書館教育と関連付けたりしながら、国際理解教育/開発教育を進めていきたい。(写真1)
- 今年度よりコミュニティスクールを進めているので、国際理解教育/開発教育についての考えをホームページや学校支援運営協議会で発信する。また、「持続可能な社会の創り手」として活躍する人材の育成について、保護者や地域の方々とも一緒に考える場を設け、地域資源を発掘し、教育活動に生かしていく。

③国際理解教育/開発教育を継続的に推進するための学校運営や教職員育成・研修等(次の世代にどのようにバトンを繋ぐか?という視点も含めて)

- 本研修をもとに、国際理解教育/開発教育の観点を職員と共有し、来年度の学校経営計画に記載し、確実に実施していく。
- JICAの国際協力出前講座を実施したり、授業で使える教材を活用したりすることで職員にJICAの開発教育支援プログラムの良さを職員に浸透させたい。
- 本研修及び本校での取り組みを校長会で話す機会を得る。校長の意識が変わることで、国際理解教育/開発教育の重要性について理解が進み、学校運営に生かしていただくことが可能となる。他校の要請にも応じ、児童や生徒、教職員に話す機会を得たい。

3. 国際理解教育/開発教育推進のために、これから取り組みたいこと

- 所属機関における本研修の報告と情報共有(研修参加の推進も含む)、職員の意識改革の推進と教育計画改善の方向性の決定
- 異文化への関心を深め、SDGsについての考える環境づくり(学校図書館司書との連携)
- グローバルな視点でとらえた「みんなちがって みんないい」の実現

4. 今後、JICA国内拠点や都道府県のJICAデスク(国際協力推進員)、その他外部機関と一緒に取り組みたいこと

- 岩手デスクの取り組み状況を理解し、JICAの開発教育支援プログラムをもっと授業に活用してもらう方策や地球ひろばのように子どもたちが活用できる展示について検討していきたい。また、状況に応じて、教育委員会への働きかけについても検討したい。
- 今後も、本研修に参加した仲間と国際理解教育/開発教育についてともに考える機会を継続していく。
- 一関市国際交流会との連携事業(ベトナムの大学生との交流)

5. 本研修を踏まえて行った報告会や情報共有について

- 全校集会で本研修の報告を2回実施した。1回目は、「世界は広い」「今の生活は当たり前ではない」「夢や目標をもつことの楽しさ」を趣旨とした。2回目は、「日本と世界の違いを楽しむ」「世界の国々の人々と助け合うことの大切さ」を趣旨とした。(写真2・資料1)
- 校内研究会で職員に本研修を報告。「国際理解教育/開発教育の重要性について」を趣旨とした。その後、全国学力調査の分析(児童アンケートも含む)を行い、子どもたちに育みたい資質・能力やそのためにどのような授業をしていけばよいのか話し合った。(資料2)
- JICA教師海外研修(教育行政コース)オンライン報告会を職員に視聴してもらい、学校経営方針の方向性を理解してもらった。



(写真1) 図書室前の掲示物



(写真2) 全校集会にて海外研修の報告

★今日の校長先生のお話を聞いて、どんなことが心に残りましたか。
心に残ったことと理由を合わせて書きましょう。

※次の条件に合わせて書きましょう。
 <条件>○二段落構成で書く。
 ○一段落目には「心に残ったこと」、二段落目には「その理由」を書く。
 ○100字以上120字以内で書く。

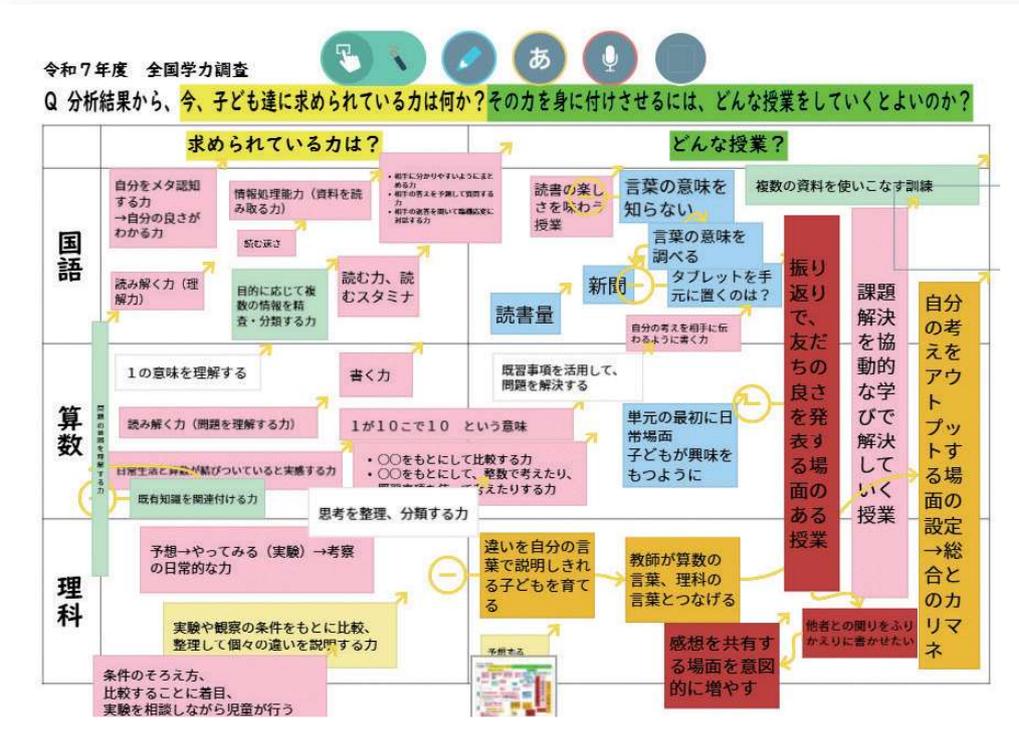
と話を聞いてから思いました。
 たくさんの人から助けを求めたい。
 たのお金も少なくて、私には
 ような仲でした。おたが関係がよ
 わかりました。おたが関係がよ
 ニーギニアの話を聞いて、パ
 校長先生の話を聞いて、パ
 校長先生のお話を聞いて、パ

月 日 全校集会 校長先生のお話

年組 番名前

★★一生けんめい書けた
 AAAプラス100字以上120字以内で書けた
 AAAプラス、条件に合わせて書けた
 AAA
 さらに内容をわたくし書けた
 S

(資料1) 校長の話聞いての児童の感想



(資料2) 校内研究会での教職員による学力調査の分析

6. 所感・今後のビジョン

20代の頃に受けたカルチャーショック。アメリカとの国境を超えると別世界があった。メキシコの子どもたちが路上で物を売ったり、車の窓ガラス拭きをしたりして叫んでいた「Give me money!」発展途上国で暮らす子どもたちについて学びたいと思いつけてきた。今回の研修は、わたしにとって夢の実現である。管理職として「夢を実現することの楽しさ」や「学び続けることの楽しさ」を、職員や子どもたちに感じてほしいという思いもあった。

研修を終えるにあたり、「自分を見つめ直す」「学校経営を見つめ直す」「日本の教育を見つめ直す」というとても貴重な経験をさせていただいた。人は、「普通」とか「当たり前」という言葉を遣うけれど、その「普通」や「当たり前」は人によって異なる。自分と考えが違っていたり、自分を否定されたりすると不安になるけれど、違う価値観や考え方に気づいたときこそ、自分の「普通」や「当たり前」を見つめ直すチャンスなのだと思う。五感で感じたバプアニューギニア。本物に触れた経験と一緒に研修をした方々の考えや思いは、私の大きな刺激となった。今後もこの経験や縁を大切に、自分を更に高め、子どもたちの成長のために力を尽くしていきたい。

氏名	所属	職名	担当業務
笠井 淳子	稲城市立稲城第五中学校	副校長	

1. 研修を通して考えた「今この時代に、学校教育において国際理解教育/開発教育を推進する意味や重要性」

学校教育において、学習指導要領(前文)に示された「一人一人の生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められる。」を具体化していくときに、国際理解教育/開発教育が果たす役割が大きいのではないだろうか。

事前研修も含め、研修中にお会いしたJICAパプアニューギニア事務所及びパプアニューギニアの関係機関の方々や青年海外協力隊等の方々の様々な取り組みから多くのことを学んだ。学習指導要領(前文)と今回学んだことを関連付け、次のような意味や重要性があると考えた。

◆「一人一人の生徒が、自分のよさや可能性を認識」

→同質性の高い集団においては、自分(や自分たち)のよさや可能性を認識し、自分の行動の原動力(目標に向かって取り組む力)となっていくものを理解するような機会が限定的になってしまっているのではないだろうか。本課題を克服するのに、自分や自分たちと異なる人々と交流し、交流を通じて、自分たちのよさや可能性を認識していくことは大きな意味を持つ。

- (例)・日本を訪問し、大阪や奈良の小学生や教員と交流したソゲリ小学校の子どもたちの姿
- ・青年海外協力隊の戸高隊員や内山隊員の取り組み(算数教育、環境教育、教師研修等)
 - ・研修中に行ったプレゼンテーション(理数教育、コミュニティスクール、防災教育等)

◆「あらゆる他者を価値のある存在として尊重」

→「外国の人→パプアニューギニアの人→ソゲリ小学校の人→〇〇さん」のように、個人と個人が出会い、つながる機会を持つことで、互いの違いに気づき、知る機会となる。その中で、自らの価値観が揺さぶられることもあるだろうが、そこに優劣はないことを発見し、互いを尊重し、認め合うことのきっかけになる。

- (例)・ソゲリ小学校の子どもたちの踊りを見た、日本の小学生の感想(「堂々としていて、カッコいい」)
- ・ソゲリ小学校でのパプアニューギニアと日本の教員の意見交流
 - ・(パプアニューギニアの特徴を通じて学ぶ)異なる言語、異なる文化をもつ者同士への尊重と、直面する困難

◆「多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となる」

→JICAパプアニューギニア事務所の職員の方々やJICA海外協力隊の方々の生き方そのものが、ここに示される「創り手」そのものを体現していると感じた。人々の生活や人生に直結するような課題をパプアニューギニアの方々や協働しながら解決に奮闘する姿を日本の生徒たちが知ることで、自分たちのあり方について視野を広げ、考え方や生き方を学ぶことができる。

- (例)・日々の暮らしでは気づけない、社会的変化や地球規模で解決していかなければならない課題への理解(教育環境【教材、施設】、下水処施設、ハルニ廃棄物最終処分場) ※SDGs17の目標との関連
- ・課題解決に向けて、日本(日本人)と相手国(相手国の人々)、そして他のドナー機関(職員)とどう協力し、取り組んでいるのか(困難や工夫も含む)に対する理解

2. これからの学校経営方針やビジョンに国際理解教育/開発教育をどのように統合できるか。また自治体が設置している教育基本計画や方針の達成に向けて、国際理解教育/開発教育がどのように貢献できるか。

①学校経営方針・ビジョンにおいて、国際理解教育/開発教育をどのように位置付けるか。

●「第四次 稲城市教育振興基本計画—稲城市教育プラン—」(令和7年3月)

施策の柱Ⅱ 「未来を創造し生きぬく力」の育成の推進

4 持続可能な社会の創り手をはぐくむ教育(ESD)の推進

稲城市はESDを学校教育の中心に据えており、小中学校では、里山の自然、地域のつながりや伝統文化等、地域的な特色を活かしてSDGs(持続可能な開発目標)の視点を取り入れたESDに取り組んでいる。(ユネスコスクール市立小学校11校、中学校5校が加盟 ※小中各1校 キャンディデート校)

(1) 環境・防災・国際理解等の社会の変化に自律的に対応できる力の育成

【取り組みの方向】

・外国語教育や異文化理解等を通じて国際性を育み、社会の変化に自律的に対応できる力の育成

【取り組み例】

②ユネスコスクールとしての活動

- ・ユネスコの理想を実現するための、平和や国際的な連携の実践
- ・稲城市立稲城第五中学校

教育目標

- 進んで学び 深く考える生徒(確かな学力)
- 心身ともに たくましい生徒(健やかな身体)
- 心豊かで 思いやりのある生徒(豊かな心)

以上の稲城市の教育施策及び本校の教育目標を踏まえ、本校では、教育活動の目的をすべての生徒の「自立貢献」の歩みを切り拓くことにあると考える。そのため、学校は、全ての生徒が真に自立し、社会に貢献する人間の生き方を学ぶとともに、社会生活の基盤となる「利他共生」の価値を共有し、心を養う場所である必要がある。また、子どもたちのために、全ての教育活動を展開し、「生徒主体」の教育活動を推進していかなければならない。

これまで、指導の重点のうち、キャリア教育や特別活動・総合的な学習の時間に位置付けられてきた取り組みの一部を統合し、国際理解教育/開発教育を新たに位置付ける。それにより、一人一人の生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることのできる教育活動を展開していくことが可能となる。

②学校経営目標やビジョンを達成するための国際理解教育/開発教育の取り組み(行事・授業・課外活動など)

●ESDカレンダーの見直し

ユネスコスクールとしての更なる発展・充実を目指し、学びの4本柱(知ることを学ぶ、為すことを学ぶ、人間として生きることを学ぶ、共に生きることを学ぶ)と、本校がこれまで取り組んできた教育活動や、現在の本校の状況を踏まえて必要となった教育活動(研修での学びも含む)を基に見直しを行う。

●国際デーの活用

ESDカレンダーに位置付けられた取り組みだけでなく、生徒や教職員が日頃から世界的な課題等に目を向けられるような態度を育むため、教育、文化、科学、平和、人権などの重要なテーマについて、世界中の人々の関心を高め、行動を促すための記念日である「国際デー」について、放送委員会による昼の放送を活用した取り組みや学校司書と連携した展示図書工夫など、様々な教育活動において積極的に取り上げ、活用する。

●ゲストティーチャー等を活用した、国際理解教育/開発教育の実施

国際理解教育/開発教育の一環として、外国人留学生等を活用した授業を総合的な学習等の時間に実施する。一回限りのイベント的な取り組みにするのではなく、他の教育活動等と有機的に関連付け、取り組みを深化・発展させる。

③国際理解教育/開発教育を継続的に推進するための学校運営や教職員育成・研修等(次の世代にどのようにバトンを繋ぐか?という視点も含めて)

●海外研修を通じて学べることの重要性や意義を積極的に発信し、東京都公立学校教員派遣研修やJICA教師海外研修、ユネスコ・アジア文化センター等が主催する研修等への教員の参加を促す。また、海外での研修への参加が困難な教員に対しては、オンライン等で実施される研修や講演会等を紹介するなど、「持続可能な社会の創り手」とはどのような姿を現すのかを教職員全員で考え、共有し、教育活動として具体化する機会を持つ。

●自身も含め、日本語指導が必要な生徒及び日本語を母語としない保護者に対する支援や、ALT(外国語指導助手)との交流の機会を積極的に持ち、互いを尊重し認め合う姿勢を当たり前とする文化や風土の醸成に努める。

●学校だより等を通じ、国際理解教育/開発教育に関わる話題を積極的に発信し、生徒、教職員、保護者及び地域関係者に対し、興味・関心をもってもらう機会を設ける。

3. 国際理解教育/開発教育推進のために、これから取り組みたいこと

●教職員に対する報告又は研修

①ESD教育を担当する進路学習部に対しては、分掌部会で教師海外研修の報告を実施

②JICA地球ひろばの見学や、JICA等が実施する研修等への参加の後押し

●生徒を対象にした授業の実施

①1学年 社会科【地理分野】「オセアニア」

②2学年 地域ふれあい防災訓練の事後学習

③特別支援学級 総合的な学習の時間「国際理解」

④校内教育支援センター(ココカラルーム)での授業

※授業実施時には、校内の教職員の参観も積極的に呼びかける。

●稲城市ESD推進委員会等での還元研修の実施

4. 今後、JICA国内拠点や都道府県のJICAデスク(国際協力推進員)、その他外部機関と一緒に取り組みたいこと

- 稲城市等で実施する、国際理解をテーマにした教員研修の企画・立案、実施

- JICA職員によるキャリア講話の実施

世界各地で活躍するJICA職員の方々と中学校をオンラインでつなぎ、キャリア講話を実施(大河原誠也「国際協力ってなんだ? つながりを作るJICA職員の仕事」ちくまプリマー新書のライブ化)

- 開発途上国からの視察団の受け入れに対する協力

2年後に、パプアニューギニアの先生方の視察団が来日予定であると伺った。教育現場の視察だけでなく、パプアニューギニアの先生方と日本の教員の交流や、パプアニューギニアの教育現場における課題(授業研究等)について、パプアニューギニアと日本の教員と一緒に考える機会等の企画・実施に携わってみたい。

5. 本研修を踏まえて行った報告会や情報共有について

- ◆教育協力ウィーク2025 オープニングセッションへの参加

国・世代・立場を超え、2030年(SDGsの達成目標年)のその先にある、「教育協力のあるべき共創の未来」についてアイデア・ビジョンを共有する機会を得た。教師海外研修で得られた知見や教育現場での教育協力の知見の活用、途上国と日本の教育の共創の未来について、学校の立場から発信した。

- ◆1学年 社会科【地理分野】「オセアニア」

オセアニアについて学ぶ授業の一環として、パプアニューギニアについて紹介する機会を持つことができた。学校の図書室にある本で得られた情報の少なさについて説明した後、パプアニューギニアに関する5つの数字を手掛かりに、地理、経済、言語や文化の多様性、日本との関係(国際協力、戦争の歴史等)等について紹介した。

(生徒の感想)

- ◇授業の最初は、日本とパプアニューギニアで交流なんてあるのかなと思っていたが、授業が進む中で「国交が樹立されて50年も経っているんだ!」とか「こういう支援をしているんだ!」など、驚きがたくさんあって面白かった。
- ◇一人一人のつながりや絆がとても強く、親戚を迎えるための空港での歓迎の踊りやワントク、独立50周年を祝う姿など、人々の温かさや優しさ、自分たちの文化や国に対する誇りや大切にしている思いが感じられた。
- ◇今、自由で、不便もなく暮らせているが、他国では厳しい生活をしている人もいることが改めて分かった。パプアニューギニアの人たちの暮らしに日本が協力できていて嬉しかった。これからも他国を支えられるような日本であってほしい。
- ◇夏休みの宿題で他の国のことを調べたら、思っていたよりも面白かった。今回も同じで、知らない国を知ることができ、とても面白かった。これからも自分の知らない国をどんどん調べて分かっていきたいし、自分が知ったことを他の人に教えてどんどん広めていきたい。

〈授業で使用したスライド資料(一部)〉

PNGクイズ

PNGに関連する、次の数字は何を表しているでしょう？

- ① 5,000
- ② 600
- ③ 800
- ④ 50
- ⑤ 116と86(2024年)

1973年 15歳の女子学生が考案
 ○黄色の鳥(極楽鳥)
 ○国威、富と幸福と親善のシンボル
 ○5つの白い星(南十字星)
 ○赤・黒
 多くの部族の伝統的な色
 赤(太陽と国民の力)
 黒(航の黒いメラネシア人)



PNGクイズ ③ 「800以上の言語」

- ・人口 1,014万人(2022年)
- ・民族 メラネシア系
- ・言語 英語(公用語)
 ビジネス英語、モツ語など

★世界の言語の12%以上
 ★世界で最も言語の多様性が高い国




日本による協力



日本とのつながり —忘れてはならないこと—



◆2学年「地域ふれあい防災訓練」事後学習

稲城市立稲城第五中学校では毎年9月に、消防署や稲城市赤十字奉仕団、地域の方々のご協力の下、災害時に必要な力を身に付けることを目的に防災訓練を実施している。

応急救護について学んだ2学年の生徒に対する事後学習の一環として、学校のある地域(昼間人口の少なく、高齢化率が高いなど)で大きな災害が起きたときに中学生が大きな力となることを伝えた後、教員養成校で実施したプレゼンテーション(岩手県における東日本大震災の被害やその後の防災教育、稲城五中の地域ふれあい防災訓練や「東京マイ・タイムライン」等)について説明するとともに、パプアニューギニアでの災害、JICA東北の防災に関する国際連携等について紹介した。

防災訓練で身に付けた力が、周囲の仲間や地域の人を救うだけでなく、世界の人々を救う力にもなり得ることを考えさせる機会とした。

〈生徒の感想〉

- ◇今日は様々な体験をした後だったので、防災の話聞いたときに、災害などに関する知識は無駄にならず、自分でも力になることができると思った。日本と同じように、火山が噴火したり、地震が起きやすかったりする国が日本以外にも多いことを知ることができた。友達が「小さなことでも、いずれ、自分が世界を救うことができる。」と言っていたが、本当にそのとおりだと思った。
- ◇もしいつか大きな災害が起きてしまったとき、地域の人のために動くのは私たちなんだと改めて思った。頼りになる大人がいなくても、焦らず行動するためには、一人ひとりが日頃の訓練にまじめに取り組んだり、災害についての意識をもったりすることが重要だとあらためて思った。国籍や言語が違って、誰にでも声をかけて、助けてあげられるような大人になりたい。
- ◇稲城だけでなく、三宅島やパプアニューギニアなどいろいろな地域のリアルな話を聞くことができ、防災の学習の幅が広がった気がした。パプアニューギニアに住む方たちが、大変な状況でも頑張っていることを知り、比較的恵まれている私も、自分にできることを一生懸命やろうと思った。まずは、隣にいる人を助けられる人になりたい。
- ◇今日の授業で、自分が暮らしている国や地域を離れて日本との違いを経験し、どうしたらその国や日本をよりよくできるかを考え、一人の人間としてどう貢献できるかを学び、考え、実行することが重要であることを学んだ。私もいろいろな国の人や生活を見ることが夢なので、今日の話聞いて、更に身が引き締まった。
- ◇先生たちのパプアニューギニアでの発表やJICA東北の取り組みを聞いて、ある問題をその国の問題として考えるのではなく、自分たちの問題として捉えて対策をしたり、協力して問題に向き合ったりしていたのが心に残った。世界には苦しんでいる人たちがいて、その人たちのために海をきれいに行ったり、ゴミをきれいにしたりと、人々のためにいろいろな取り組みが行われている。今後は、生活が厳しい人たちもいると心に刻み、今の生活をより一層有難いと思って生活していきたい。
- ◇今までJICAについて名前は知っていたが、どんなことをするのかまではよく分からなかった。今日の話を通して知ることができ、知識の幅が広がった。また、五中でも世界に向けた行動ができること、世界では自分たち以上に苦しむ人がいるということを知った。自分も世界に飛び立って、様々な現状を知っていこうと思った。
- ◇海外に行くとき、その国がどんな国か、政治はどうなのかなど、前もって調べておくと「知った気」になれるが、実際行ったときに感じないと分からないこともたくさんあることが分かった。事前に学ぶことで得られる情報も多いが、それで「知った気」になることはなるべく避けたいし、「好奇心」を忘れないことがとても重要だと思った。

※授業は、保護者の方々、応急救護講座を担当して下さった稲城市赤十字奉仕団の方々、2学年の教員も参観し、防災訓練の意義や価値を共有する機会とすることができた。

6. 所感・今後のビジョン

本研修を振り返り、管理職が受ける意義や今後取り組みたいことについて3点考えた。

第一に、本研修を通じて、自分たちが日本で取り組む教育活動の意義や価値を捉え直すことができたことである。

教育省を訪問した際、日本の子どもたちの算数や理科の成績が良い理由について質問があった。一緒に研修に参加した大西さんが、日本ではスモールステップで指導を進めていくことや、学年を越えて学習内容をスパイラルで展開していくことで、子どもたちの学力を伸ばしていることを説明してくださった。そして、翌日ソゲリ小学校で拝見した、JICA海外協力隊の戸高さんの算数の授業は、まさに、教育省で説明した内容を体現した授業だった。子どもたちは授業の中で、「できた」「分かった」を実感し、学習に主体的に取り組んでいた。

また、教員養成校で実施した防災教育の発表における、現地の先生方の感想等からも、日本の教育活動の価値を捉え直すことができた。

この経験を通じ、日本で大切にしてきた授業研究のような取り組みの持つ意義や価値、それに基づく教育活動を通じて、私たちが培ってきたものの意味をあらためて捉え直すことができた。働き方改革が進む中で、研修の場は減りつつあるが、それでもなお、子どもたちの学力を伸ばすためにどうしていくべきかを考え続けることが重要であることを発信していきたい。また、子どもたち学びに向かう意欲や主体性を引き出し続けられる教育活動を考えていきたい。

第二に、日本語指導が必要な子どもたちの受け入れや指導・支援を見直すことができたことである。

今回、日本と大きく異なる国に滞在し、様々な場面でいつもどおりの自分でいられない、もどかしさや不自由さを感じた。その一方で、7日間を終えて心に残ったのは、パプアニューギニアの方々やパプアニューギニアで出会った日本の方々の温かさや優しさだった。

この経験は、日本語指導が必要な子どもたちが増加する日本の学校で、どのように彼らを受け入れ、関わっていくべきかを考える上で貴重な経験となった。言葉にできなくても、困っていることはないか、母国と同じように、自分らしく振る舞っているかに思いを馳せ、リーダーである管理職自らが手を差し伸べる、あるいは、必要な支援を教職員に伝えていくことは、学校の文化や風土をつくる上で重要であると考えた。また、その状況を理解し、熱心に指導・支援に取り組んでいる先生方をサポートしていくことも、管理職の重要な役割である。

海外という環境に身を置いたからこそ理解できたこと、また、パプアニューギニアで出会った子どもたちの輝く姿を忘れずに、日々の学校生活の中で実行していきたい。

第三に、研修を通じ、互いを生かし、学び合う集団の一員としての得られた経験によって今回の研修は、意欲的な仲間、情熱あふれるJICA職員の方々やコーディネーターの方々に支えられ、忘れられないものとなった。パプアニューギニアでの学びを核に、全員が理想とする学校や自らの果たすべき役割について考えを深められる研修になったのは、誰もが主体的に自分の役割を果たし、互いの意見や姿から学ぶことを常に大切にしていたからである。

この経験は、管理職として、教職員一人一人の存在を生かし、成長し続ける組織を目指していくうえで、大きな原動力となり、エネルギーを与え続けてくれるはずだ。研修に参加した私たちに求められるミッションは、簡単ではないこともあると思うが、一緒に感動し、悩み、考えた仲間を思い出し、時には意見を交換しながら、理想の教育、理想の学校を目指して、楽しく取り組んでいきたい。また、学校にいるからこそできること、教員だからこそできることという強みを生かして、様々なことに挑戦していきたい。

氏名	所属	職名	担当業務
稲田 恒久	豊橋市立磯辺小学校	校長	学校経営、豊橋市小中学校英語教育研究部顧問校長、豊橋市小中英語企画委員会委員長、コミュニティ・スクール先行導入校活動推進、ユネスコスクール加盟校活動推進

1. 研修を通して考えた「今この時代に、学校教育において国際理解教育/開発教育を推進する意味や重要性」

2002年に開催された「持続可能な開発に関する世界首脳会議(ヨハネスブルグサミット)」では、当時の小泉首相が「持続可能な開発のための教育(ESD)の10年」を提案し、各国の政府や国際機関の賛同を得て、実施計画に盛り込まれた。2002年の第57回国連総会では、2005年からの10年を「ESDの10年」とする決議案が満場一致で採択され、この推進機関としてユネスコが指名され、2005年9月に国際実施計画が策定された。

2015年の国連サミットにおいては、先進国を含む国際社会全体の目標として、「持続可能な開発目標(SDGs:Sustainable Development Goals)が採択された。SDGsは、「誰一人取り残さない」社会の実現を目指して、2030年を期限とする包括的な17の目標及び169のターゲットにより構成されている。ESDは、ターゲットの1つである目標4「すべての人に包摂的かつ公正な質の高い教育を確保し、生涯教育の機会を促進する」として位置付けられているだけでなく、SDGsの17全ての目標の実現に寄与するものであることが第74回国連総会において確認されている。持続可能な社会の創り手を育成するESDは、持続可能な開発目標を達成するために不可欠である質の高い教育の実現に貢献するものとされている。こうした経緯からも、持続可能な開発のための教育(ESD)は、現行の学習指導要領改訂の全体において基盤となる理念となっている。

本研修で訪れたバプアニューギニアにおいてもSDGsが国家事業や教育制度等の基盤となっており、その達成に向けた取り組みがなされていることを実感することができた。日本の小中学校が国際理解教育、開発教育に取り組むことは、現行の学習指導要領が求める世界的視野に立った教育活動を推進するうえで、必要不可欠であることを改めて確認することができた。

豊橋市は、2019年度から「豊橋からSDGsで世界と未来につなぐ水と緑の地域づくり」により内閣府から「SDGs未来都市」に選ばれ、豊橋市がめざす「2030年のあるべき姿」の達成に向けて取り組んでいる。その「社会」分野における指標「SDGsを理解している住民の割合」は、2020年の9.8%から2024年の54.7%に上昇している。「2030年に100%の住民がSDGsを理解すること」の目標達成に向けて、引き続き各校における国際理解教育、開発教育の推進が求められている。

2. これからの学校経営方針やビジョンに国際理解教育/開発教育をどのように統合できるか。また自治体が設置している教育基本計画や方針の達成に向けて、国際理解教育/開発教育がどのように貢献できるか。

①学校経営方針・ビジョンにおいて、国際理解教育/開発教育をどのように位置付けるか。

- 本研修での気づきや学びを、児童、地域、家庭と共有し、ユネスコスクールとして取り組む国際理解教育、開発教育等を磯辺小の特色ある教育活動の一つとしてより一層推進する。
- ユネスコスクールは、文部科学省及び日本ユネスコ国内委員会によって、ESDの推進拠点として位置付けられている。本校が推進する国際理解教育及び開発教育においては、豊橋市及び周辺市町の推進拠点校となる役割を担っていることを、児童や家庭、地域と共有するとともに、こうした教育活動の推進に向けて協働して取り組んでいく。

- 豊橋市は、将来、グローバル社会で活躍できる人材の育成をねらいの一つとして、国語、道徳等を除く教科・領域等を英語を用いて学ぶ公立小学校で初となるイマージョン教育コースを八町小学校に6年前に開設している。これまでの本市の英語教育の集大成として取り組まれている先進的な英語教育の成果を共有し、全市的な英語教育の向上につなげることも求められている。英語をコミュニケーションツールと身に付けると同時に、国際理解教育及び開発教育を推進し、望ましい国際的視野や感覚等、情意面での育成にも取り組んでいく。
- 豊橋市は、36万余りの人口のうち、2万人を超える外国人が暮らしている。多文化共生社会がより一層進むことが予想される豊橋市においては、小中学校、特別支援学校において、国際理解教育及び開発教育の充実を図り、世界的な視野でダイバーシティを理解し、将来の地域コミュニティづくりに貢献できる人材の育成に取り組む。
- パプアニューギニアでODAの援助を受けた下水処理施設や廃棄物最終処分場を見学した。その際、国土交通省の官僚として、在ブラジル日本国大使館の一等書記官やパナマ海運庁にJICAの長期専門家として出向した経験のある市長が取り組んだ事業を思い出した。具体的には、「インドネシア共和国スマトラ島ソロク市への水道技術者派遣及び水道技術の普及」や「バイオマス利用活用センターの整備」などであり、あらためて市長が推進した事業を思い返すとともに、その意味を再認識した。将来に向けて確固たるビジョンをもってリーダーシップを発揮することの大切さをあらためて感じた。

②学校経営目標やビジョンを達成するための国際理解教育/開発教育の取り組み(行事・授業・課外活動など)

- 国際平和、環境、ジェンダー平等、多文化共生など、子どもたちが将来にわたって取り組むべき問題について、気づき、深い学びにつながるよう、総合的な学習の時間を中心とした、教科横断的、系統的なカリキュラムづくりに、教職員や地域の方々とともに取り組む。
- ユネスコスクールとして、国際交流や地域交流に積極的に取り組み、子どもたちの体験に戻づく深い学びの実現を目指す。そこで得られた成果を積極的に地域に向けて発信し、子どもたちの自己有用感や自己肯定感の育成を図ることで、持続可能な地域コミュニティづくりに貢献できる人材の育成を図る。
- 豊橋市が先進的に取り組んできた英語教育、外国人児童生徒教育のこれまでの実践を活かしながら、将来に向けた確固たるビジョンを共有し、その実現に向けた国際理解教育、開発教育を、地域、家庭、学校が協働して取り組む。

③国際理解教育/開発教育を継続的に推進するための学校運営や教職員育成・研修等(次の世代にどのようにバトンを繋ぐか?という視点も含めて)

- 磯辺小の授業、コミュニティ・スクール主催のサマースクール、豊橋市英語研究部の研修会等の機会、パプアニューギニアでの研修で得られた気づきや、学びを発信し、参加者とともに共有する。英語研究部の顧問校長の立場を活かして、豊橋市の英語教員と国際理解教育、開発教育の実践に、協働して取り組んでいく。
- パプアニューギニアでの研修で得られた気づきや学びは、日本の学校生活に慣れ親しんだ児童生徒、教職員、地域の人々の国際感覚や理解に強いインパクトを与え、注目・関心を集めることができる。この好機に、公開授業や授業支援等を通して、国際理解教育/開発教育の必要性や楽しさを共有し、これらを活かしたカリキュラムづくりが全市的な広がりとなるよう働きかけていきたい。
- 国際理解教育や開発教育の必要性や価値を保護者や地域の方々とも共有し、教育活動に参画してもらうとともに、そのカリキュラムを地域の方々にも引き継いでもらうよう働きかける。

3. 国際理解教育/開発教育推進のために、これから取り組みたいこと

- パプアニューギニアでの研修について、学校ホームページに掲載したり、地域、保護者の方々の参観も可能とする公開授業を実施したりして、研修を通じた気づきや学びを児童や保護者、地域の方々と共有する。本校の国際理解教育や開発教育が、今後も特色ある教育活動として共有され、地域、家庭、学校が協働して、この推進に取り組めるよう働きかける。
- 豊橋市の英語教員の多くが参加する研修会でパプアニューギニアでの教師海外研修の成果を共有し、出前授業や国際交流の支援を行ったり、JICAによる教員研修や授業支援等を周知したりして、国際理解教育や開発教育の全市的な推進につなげる。
- 勤務する磯辺小の子どもたちとは愛知県ユネスコスクール交流会のポスターセッションや成果物展示等で学びを発表する機会をいただいている。国際理解教育や開発教育の推進拠点校として子どもたちとともに学習の成果の発信に取り組む。

4. 今後、JICA国内拠点や都道府県のJICAデスク(国際協力推進員)、その他外部機関と一緒に取り組みたいこと

- 英語等の授業で、協力隊員やJICA職員が活動している現地の児童生徒とオンラインでつなぎ、英語を用いてコミュニケーションを図ったり、お互いの学校や文化について紹介したりする授業の実現に向けて支援したい。
- 総合や英語等の授業で、JICA職員や元隊員の方を講師として招いて、現地の生活や文化に触れたり、現地での仕事や業務、仕事について学んだりする授業を実現したい。
- 日本で活動する研修生や海外から日本に派遣された教職員や児童生徒を学校に招いて、授業や学校生活等の体験を通して、国際交流を図りたい。

5. 本研修を踏まえて行った報告会や情報共有について

①豊橋市研究部研究大会 小中英語部会(8月7日)の指導・助言

「グローバル社会で活躍する児童・生徒の育成」を旨とした研究実践レポート発表やグループ協議等に関して、指導・助言(20分)を行う中で、パプアニューギニアでの研修の共有と今後の海外交流や教員研修について助言を行った。「教師海外研修をはじめとするJICAの研修に積極的に参加して、そこで得た気づき、学びを英語部全体でシェアしましょう」と呼びかけた。

②夏休み中学生英語体験活動「English Camp」(8月18日~20日)のランチタイムトーク

1時間のランチタイムの後半20分ほどの時間をもらい、パプアニューギニアでの研修で得た気づきや学びを、参加生徒や活動支援ボランティア、ALT等と共有、意見交換を行った。参加生徒には「JICAの海外協力隊員には、20~69才まで応募できるので、10年後、私とともに協力隊員として国際貢献にチャレンジしませんか」と呼びかけた。

③豊橋市中学生英語スピーチコンテスト(8月25日)のインフォメーション

審査結果を待つ20分ほどの休憩中の10分ほどをもらい、豊橋市全中学校23校の代表生徒や参観保護者、教員、ALTなどとバプアニューギニアでの経験を共有するとともに、国際理解、多文化共生、ダイバーシティなどをテーマとしたスピーチを行った代表生徒に、「JICA国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト2025に応募してみませんか」と呼びかけた。豊橋市の中学生が応募にチャレンジしてくれることを願うとともに、その応募作品、内容をシェアする機会があることを願っている。このスピーチコンテストは、ケーブルテレビ「ティーズ」でも放映された。

④磯辺小コミュニティ・スクール(CS)主催「サマースクール」の講話(8月6日、26日、27日)

午前中の自主学習時間のうち40分ほどの時間をもらい、1～6年生の参加児童とともに、バプアニューギニア研修で訪問したソゲリ小学校の写真や動画を視聴し、子どもたちが気づいたこと、感じたことをシェアしながら講話を進めた。算数や理科で日本と同様の教科書を使いながら、一生懸命に学習に取り組む姿や休み時間に縄跳びで楽しそうに遊ぶ姿に、子どもたちは特に共感し、親しみを感じたようであった。



①豊橋市研究部研究大会 小中英語部会



②夏休み中学生英語体験活動



③豊橋市中学生英語スピーチコンテスト



④磯辺小CS主催「サマースクール」

⑤磯辺小学校各学級での「国際理解教室」の授業(9月5日～)

2学期がスタートし、磯辺小の1年生から6年生、特別支援学級で、主に学級単位で「国際理解教室」の授業を行った。6年生は、バプアニューギニアの廃棄物や下水処理をはじめとする環境問題に、特に興味・関心を示した。1年生は、バプアニューギニアに関するクイズを通して、楽しみながら外国への興味・関心を高めた。6年生の授業についてはプレスリリースを行い、授業内容は、地方紙やコミュニティFMで紹介された。

⑥ 愛知県ユネスコスクール交流会の学習成果発表 (9月20日、10月4日)

9月20日に愛・地球博記念公園で行われた愛知県ユネスコスクール交流会(愛・地球博20祭)では、磯辺小の海外交流活動をまとめたポスターおよび成果物の展示発表を行った。磯辺小のマスコットキャラクター(むくろう・むく葉・むくみ)が刺繍されたキャップとともに、本研修で訪れた様々な場所の景色や、そこで出会った人々と写真撮影する「むくろうキャッププロジェクト」を紹介した。また、磯辺小で実施した「国際理解教室」で紹介した、本研修の思い出の品も展示した。

さらに、10月4日に愛知県国際展示場(Aichi Sky Expo)で行われた愛知県ユネスコスクール交流会では、本研修での気づきや学びを共有した「国際理解教室」や「むくろうキャッププロジェクト」を含め、6年生の代表児童が学習成果をポスターセッション形式で発表した。

「むくろうキャップ」プロジェクト

豊橋市立磯辺小学校

■「むくろう」「むく葉」「むくみ」海を渡る!

磯辺小マスコットキャラクター「むくろう」「むく葉」「むくみ」が刺繍された帽子をゲストに贈り、ゲストの住まわりの景色とともに撮影した写真を、磯辺小の子どもたちに届けてもらうプロジェクトです。

■「むくろう」、リトアニア共和国へ!

5月23日に磯辺小学校に来校いただいた、豊橋市のパートナー・シティであるパネヴェジス市(リトアニア共和国)の先生方から、子どもたちと撮影した写真が届きました。



■「むくろう」、バブアニューギニアへ!

磯辺小校長が「JICA教師海外研修(教育行政コース)」で、バブアニューギニアに渡りました。

ソグリ小学校、ソグリ高等学校、教員養成校などを、「むくろう」キャップとともに訪問しました。

今、磯辺小の子どもたちの思いは、「むくろうキャップ」とともに、バブアニューギニアにも渡っています。



■「むくろう」、ニュージーランドへ!

磯辺小児童が夏休みに、来日時に磯辺小で体験入学をした児童が住むニュージーランドを訪れ、交流を深めました。「むくろうキャップ」は、人と人との絆をつないで、世界中の様々な景色とそこに住む人々の思いを届けてくれています。



⑦FMとよはし「とよはし学生ビブリアバトル」出演(9月19日)での近況報告

10月4日の愛知県ユネスコスクール交流会で学習成果をプレゼンする予定の6年児童2名とともに、コミュニティFMの番組に出演した。児童2名が、磯辺小の国際交流についてインタビューを受けるとともに、私自身も1分ほどの自己紹介・近況報告で研修でパプアニューギニアに行ってきたことを報告した。番組を聞いた地域の方々から「パプアニューギニアはどんなところでしたか?」と質問を受けることも多く、パプアニューギニアでの体験をシェアする機会が広がっている。

⑧第16回「ESD大賞」優秀賞受賞

愛知県ユネスコスクール交流会(10月4日)のポスターセッションで6年児童が10分間のプレゼンを行った。それを参観されていたESDの第一人者として知られる 手島利夫先生から高い評価をいただき、締め切りが1週間後に迫っていた「ESD大賞」にエントリーすることを勧められた。1週間ほどでエントリーシートに学習の成果を記述することができるのか、迷いに迷った。そのときに頭に浮かんだのが、JICAパプアニューギニア事務所の松岡所長がおっしゃった「税金を使って進めるODA事業は、国民への説明責任があり、理解を得なければならない。」という主旨の発言である。温厚な人柄の松岡所長がきっぱりとおっしゃった言葉が今も心に響いている。JICA教師海外研修で得た学びは、可能な限り多くの方と共有する責任があると思い、エントリーシート作成に向かったところ、その結果、思いもよらず「優秀賞」を受賞することができた。

12月6日に東京の上智大学で行われた「ユネスコスクール全国大会」の中で行われた授賞式に参加した機会に、パプアニューギニアとともに学びを深めてくれたGiFTの木村さんや参加者の笠井さんに出会うことができた。お二方との再会を通し、JICA教師海外研修で得られた学びとつながりが今も続いていることを実感することができた。

東京から戻り、国際理解/開発教育での学びを中心に発信してくれた子どもたちと「優秀賞」受賞の喜びを分かち合った。この子どもたちとは、1月に豊橋市役所で教育長表敬訪問を行い、2月には豊橋市を訪問する駐日リトアニア大使と歓談する予定である。こうした機会をいかして、JICA教師海外研修で得た学びを、これからも多くの市民の方々と共有できたらと考えている。



「優秀賞」受賞を支えてくれた子どもたち

6. 所感・今後のビジョン

- 渡航危険レベル1の途上国で、教員研修を行うにあたって、JICA等の同行者及び現地事務所職員の方々による安全管理、危機管理に心から感謝している。今後、勤務校等でリスク・マネジメントを遂行する上で、私自身の危機管理意識を見つめなおす貴重な機会となった。
- 市教委の指導主事であったときに、当時の市長の発案をもとに、公立小学校では全国初となる英語を用いて教科等を学ぶ「イマージョン教育コース」の開設に携わった。当時の市長が同時期に推し進めていた「バイオマス利活用センター(バイオマス発電所)の建設」や「インドネシア・ソロク市水道局に対する浄水技術支援」等の

施策が、「イマージョン教育コース」と結びつかなかったが、下水処理場や廃棄物最終処分場を見学する中で、様々な施策を世界的視野に立って取り組んだ市長の思いに、はっと気づくことができた。国土交通省の官僚として、在ブラジル大使館一等書記官やパナマ共和国政府派遣（国際協力事業団長期専門家）などのキャリアを有する当時の市長から、リーダーとして確固たる未来ビジョンを有することの大切さに今更ながらに気づかされた。この市長が境港工事事務所長時代には、境港の「水木しげるロード」の建設にも尽力されたことを知り、その先見性と実行力には敬服するばかりである。

- JICAパプアニューギニア事務所での研修の振り返りを行う中で、当時の市長の海外における施策等を理解できなかったことを話したとき、松岡所長が、「税金を投入した施策には、説明責任と理解を得ることが必須である」とはっきり意見を述べられた。大変多忙の中で、リスクも生じる教師海外研修を、チーム全体を統括し温かく受け入れてくれた。その一方で、ODAをはじめとする税金を投じる事業については厳しい態度を示され、そこにリーダーとしてあるべき姿を感じた。
- 教師海外研修に応募し、事前研修から研修を重ねていく中で、私が使用するパソコンや携帯端末のニュースソースにはJICAやODA等の関連ワードが多く見られるようになった。このように、この研修をきっかけとして、私自身の国際理解、多文化共生等の知識、思考が日々ブラッシュアップしているように感じられる。加えて、たった7日間程であったが、パプアニューギニアでの研修のおかげで、TICADに関連して起きた「ホームタウン」論争についても、様々な主張、意見を受け止めながら、自分なりに納得がいく答えを抱くことができています。
- 事前研修、事後研修も含めて、パプアニューギニアを舞台として行った研修で得た気づき、学びを、他者と共有したいという思いが強く、ありとあらゆる機会にパプアニューギニアの経験を発信している。これまでに気づき、学びを共有した教職員、地域の方々、そして児童生徒いづれもが、好意的に私の話に耳を傾け、強い関心をもってそれを受け止めてくれている。
- 2年生児童が夏休みの作品として作成した見事な「大屋根リング」の正面に並ぶパプアニューギニアの国旗の存在に感動するとともに、その作品を食い入るように眺める子どもたちからも「パプアニューギニアの国旗だ」と聞くことができた。また、1年生の児童が、見開き2ページの国旗イラストを広げ、「パプアニューギニアはどこだ？この本ではオーストラリアと離れてるねえ。」とつぶやいていた。様々な場面で、この研修が子どもたちに与えたインパクトの強さを実感している。
- 愛知県では、60歳で役職定年を迎え、65歳までは教諭として、子どもたちの教育に携わることとなる。65歳の定年まで、子どもたちに「グローバル社会で活躍する生き方モデル」を示すことができる教員として授業を行いたいと強く思い始めるとともに、国際理解教育、開発教育の推進者として活躍したいと願っている。たった10日間ほどの研修で、自分でも驚くほど、指導観やビジョン（未来観）をブラッシュアップすることができたので、残り10年ほどの教員人生でも、もっと自分を磨き、魅力ある教員となれるという期待も抱いている。こうした思いを抱かせてパプアニューギニアとJICAの職員、そして一緒に研修に参加してくれた先生方に心より感謝している。



2年生児童が制作した大屋根リング模型

氏名	所属	職名	担当業務
杉浦 繁	愛知県西尾市立佐久島しおさい学校	教頭	教頭業務、特別支援コーディネーター、教科指導等

1. 研修を通して考えた「今の時代に、学校教育において国際理解教育/開発教育を推進する意味や重要性」

現在、世界はますます相互につながり合い、国境を越えた課題が数多く存在している。そのような中で、子どもたちがこれからの社会を生きていくためには、世界の多様な文化や価値観を理解し、共によりよい未来を築こうとする姿勢が求められていると感じた。

特に今回の研修を通じて、パプアニューギニアのように多くの課題を抱えながらも、地域や文化に根ざしてたくましく生きる人々の姿に触れたことで、「自分たちの当たり前」が決して世界の常識ではないことに気づかされた。この気づきこそが、国際理解教育の出発点であると実感した。

また、開発教育とは、課題を抱える国を「かわいそうな存在」として一方的に見るのではなく、互いに学び合い、協力して課題解決に取り組む姿勢を育てる教育である。SDGsの理念に基づき、身近な暮らしと世界の出来事がつながっていることを知ることは、児童生徒が社会の一員として行動する力を育むことにつながる。

今後の学校教育においては、国際理解教育/開発教育を「特別な活動」として位置付けるのではなく、日々の授業や学校行事の中に自然に取り入れることが重要である。すべての子どもたちが、地域に根ざしながら、同時に世界にも目を向けられるような学びを保障していくことが、これからの教育に求められていると強く感じた。

2. これからの学校経営方針やビジョンに国際理解教育/開発教育をどのように統合できるか。また自治体が設置している教育基本計画や方針の達成に向けて、国際理解教育/開発教育がどのように貢献できるか。

①学校経営方針・ビジョンにおいて、国際理解教育/開発教育をどのように位置付けるか。

学校経営方針：「知・徳・体の調和のとれた人間形成を図るとともに、島に誇りをもち、自分の未来を切り拓いていく児童・生徒の育成」

- 「島に誇りをもつ力」と「多様性を尊重する力」の両立を図り、地域に根ざしつつ、広く世界とつながる視野を育てる。
- SDGsや国際課題を通して、自ら課題を見つけ、他者と協働しながら解決に向かう探究的な学びを、学校教育の柱とする。
- 児童生徒・教職員ともに、地域社会の一員であることを自覚しつつ、「地球市民」として行動できる資質・能力の育成を目指す。

②学校経営目標やビジョンを達成するための国際理解教育/開発教育の取り組み（行事・授業・課外活動など）

- 総合的な学習の時間において、佐久島の自然や文化を題材としながら、他地域や世界の事例と比較することで、広い視野をもった探究活動を進める。
- 学校行事（島民ふれあい大運動会や学芸会）、海の活動、里山保全活動などに、世界の文化やSDGsの視点を取り入れ、地域と世界をつなぐ実践とする。
- 課外活動や特別授業においては、JICA海外協力隊経験者である教職員自身の体験を活用したり、本校で継続的に行われている愛知教育大学の留学生との交流機会を通じたりして、児童生徒が世界の多様な文化に触れ、地球市民としての意識を育む。

③国際理解教育/開発教育を継続的に推進するための学校運営や教職員育成・研修等(次の世代にどのようにバトンを繋ぐか?という視点も含めて)

- 児童生徒と教職員が参加する全校集会において、海外研修の報告を行い、児童生徒の国際的な視野を広げるとともに、教職員にとっても国際理解教育の導入のきっかけとする。
- 報告会を一過性に終わらせず、写真や短いコメントを校内LAN掲示板や職員室に定期的に掲示することで、日常の中で無理なく関心を継続させる工夫を行う。
- 職員向けの情報共有においても、校務連絡メールに1行の豆知識を添える、児童の探究活動と関連づけて話題を出すなど、OJT的に自然な形で教職員の学びを広げていく。

3. 国際理解教育/開発教育推進のために、これから取り組みたいこと

- 8月25日の出校日の全校集会において、児童生徒および教職員に向けてバプアニューギニアでの学びを発信する帰国報告会を実施する。
- 10月1日に予定されている教頭会でも、本研修の成果について共有する機会を設けるよう依頼している。また、職務免除により参加した研修であることから、教育委員会に対して報告書を提出し、制度的な信頼と連携を図る。
- 英語活動を担当している小学校低学年の授業において、今回の海外研修で得た知見や異文化理解の視点を取り入れた活動を試行する。身近な英語の授業の中に「世界を知るきっかけ」を盛り込むことで、児童にとって国際理解教育を身近に感じられる工夫を行いたい。

4. 今後、JICA国内拠点や都道府県のJICAデスク(国際協力推進員)、その他外部機関と一緒に取り組みたいこと

- オンラインによる国際交流授業の実施
JICA海外協力隊員や帰国隊員、留学生とオンラインでつなぎ、児童が現地の暮らしや文化について直接質問できる授業を企画する。離島であっても、交通費や移動時間をかけずに世界と交流できる形を活用する。
- JICA教材・映像資料の活用と授業への組み込み
JICAが提供する国際理解教育用教材や映像資料を、総合的な学習の時間や英語活動で活用する。児童の探究テーマと関連付けることで、地域学習と世界の課題を結びつける学びをつくる。
- 地域イベントでの世界文化紹介コーナーの設置
島民ふれあい大運動会や学芸会など、地域とつながる行事において「世界の文化紹介」コーナーを設置し、児童が調べた国や地域の暮らし・遊び・衣食住などを展示する。その中で、今回の研修で訪れた国(バプアニューギニア)も一つのテーマとして紹介し、自然な形で島民と共有する。

5. 本研修を踏まえて行った報告会や情報共有について

全校集会

8月25日の出校日に全校集会を行い、児童生徒および教職員に向けて帰国報告を行った。本校は義務教育学校であり、小学1年生から中学3年生まで9学年が一齐に集まる。そのため、低学年でも理解でき、高学年でも興味を持てるよう、話題を「ソゲリ小学校の訪問」に絞り、写真と短いキーワードを組み合わせたパワーポイントを用いて発表した。

時間は15分程度と限られていたが、現地校の子どもたちの様子や学習環境の違いを中心に紹介した。児童生徒からの反応は控えめであったが、終了後に数名が感想を伝えに来てくれたことから一定の関心は示されたと感じた。教職員からは「分かりやすかった」との声があり、今後は児童が質問できる時間を設定するなど、双方向性を意識して工夫していきたい。

報告会

8月22日の事後研修では、研修参加者とともに報告会に向けての打ち合わせを実施した。9月10日の報告会で私は「ソゲリ小学校訪問」と「ごみ処理最終処分場での学び」を中心に発表し、3分程度で自分の最も心に残ったことを簡潔にまとめた。その後、大西先生・菊池先生とともにトーク形式で議論を深め、「海外研修から得た学びを教育現場にどう生かすか」について私たちの考えを参加者に伝えた。

当日のオンライン報告会に向けて知り合いに対して広報活動を行ったが、視聴者は私が想定より少なかった。しかし、教員以外の友人が視聴してくれたことは意外であり、教育関係者以外にも関心を持ってもらえるテーマであることに気づいた。今後は発表方法や広報の工夫を重ね、より多くの人に届けられるよう取り組みたい。

6. 所感・今後のビジョン

現在の立場でできることには限りがあるが、教育者として理想を描き、それに向かうビジョンを持つことはできる。私が目指すのは、多様性を尊重し、互いを認め合える子どもを育てる学校である。

日本では少子高齢化に伴う人手不足や外国人労働者の増加により、外国にルーツを持つ児童生徒が年々増えている。一方で、異文化や障害に対する理解が十分に行き届かず、排他的な態度が見られる場面もある。しかし、子どもの頃から多様な背景を持つ仲間と共に学んだ子どもたちは、自然に違いを受け入れる力を育てていると実感している。逆に、そうした出会いの少ない環境では、多様性への耐性が弱くなりがちである。だからこそ、国際理解教育や開発教育を意図的に組み込み、どの子どもも多様性を理解し尊重できるようなカリキュラムを整えることが重要である。

前任校では、平成の早い段階から国際理解教育や外国語教育に積極的に取り組んでいた。最近では外国にルーツを持つ児童が一割を占め、特別な支援を要する子どもも多くなった。しかし、教育の積み重ねや子ども自身の力、さらには環境によるものもあってか、子どもたちは自然に違いを受け入れ、力強く学びに向かっていた。一方、現在の学校や自分の子どもが通う学校のように外国籍児童が少ない環境では、同じように多様性を受け止める力が育っているのかは分からない。だからこそ、そうした学校にこそ多様性を受け止める力を養う仕組みをつくる必要があると感じている。

私は今後、教頭として学校経営に携わる立場から、国際理解教育や開発教育を教育課程や学校行事に計画的に組み込み、児童生徒が互いの違いを学び合える場を創出していきたい。たとえ身近に外国にルーツを持つ児童がいなくても、多様性を想像し、受け入れる力を育てることは可能である。そのような教育の場を築き、国際社会に生きるたくましい子どもを育てるとともに、持続可能な社会の創り手を育てることが、私の理想であり今後のビジョンである。

氏名	所属	職名	担当業務
大西 敏之	奈良市立大安寺西小学校	校長	学校経営

1. 研修を通して考えた「今の時代に、学校教育において国際理解教育/開発教育を推進する意味や重要性」

百聞は一見に如かず。

パプアニューギニアのことやJICAの取り組みについて事前に調べたり、事前研修で学んだりしたが、現地でJICAパプアニューギニア事務所の職員から話を聞いたりパプアニューギニアの教育省の方と意見交換をしたり、ソゲリ小学校や下水処理施設などの施設を訪問したりすることで、ODAの重要性とその効果を実感することができた。そこから、国際理解教育や開発教育は、単に海外の文化を知るためのものではなく、私たち教員が、日本の教育の「当たり前」を相対化し、新たな視点から自らの実践を見つめ直す機会になると考える。私自身、海外の学校や子どもの様子を目の当たりにし、日本の教育の強みと授業改善の視点を改めて認識することができた。

そして、子どもたちにとっては、遠い国に暮らす人々の生活や文化、社会課題に目を向けることで、多様な価値観を理解する第一歩となる。また、日本の文化や伝統を見つめ、自分の生活を見つめ直すことになると考える。これは、彼らが将来、グローバル社会の一員として、他者と協調し、共生していくために不可欠な資質で力になると思う。

2. これからの学校経営方針やビジョンに国際理解教育/開発教育をどのように統合できるか。また自治体が設置している教育基本計画や方針の達成に向けて、国際理解教育/開発教育がどのように貢献できるか。

①学校経営方針・ビジョンにおいて、国際理解教育/開発教育をどのように位置付けるか。

国際理解教育・開発教育を、自他を尊重し、社会に貢献する資質・能力を育むための重要な柱と位置付ける。具体的な重点項目は以下の通り。

●自己と他者への理解を深める教育

日本の文化や伝統、そして地域社会の素晴らしさを深く学び、自らのアイデンティティを確立する。その上で、世界の多様な文化、価値観、社会課題について学び、異文化を尊重する心を育む。これらの学びを通じて、グローバルな視点から自らの生活や社会のあり方を問い直し、より良い社会を築くための行動力を養いたい。

●学び続ける教師集団の育成

「百聞は一見に如かず」の精神に基づき、教員が国内外での研修やフィールドワークに積極的に参加する機会を設ける。自ら多様な経験を積むことで、国際理解教育・開発教育の重要性を深く理解し、実践的な指導力を高めることを目指す。この取り組みは、子どもたちに「主体的に学び続けること」の重要性を示す、生きた教材にもなると考える。

●人権教育との統合

国際理解教育・開発教育を、人権教育の重要な一環として位置付ける。JICAの事例にもあるように、「対等なパートナーシップ」という視点から開発教育を学ぶことで、互いの違いを認め、共生する社会の実現に向けた思考力を養う。これにより、子どもたちは「人権とは何か」をより深く多角的に捉え、身近な人間関係から国際社会まで、他者とどのように関わるべきかを考える機会を得ることができると思う。

② 学校経営目標やビジョンを達成するための国際理解教育/開発教育の取り組み(行事・授業・課外活動など)

- 海外の方や小学校との交流。
- 各教科や総合的な学習等においてSDGsの内容の取組と国際理解教育の推進。
- 国際理解をテーマにした講演会の実施

③ 国際理解教育/開発教育を継続的に推進するための学校運営や教職員育成・研修等(次の世代にどのようにバトンを繋ぐか?という視点も含めて)

- JICA等が行う海外研修への参加を積極的に促す。
- JICA関西の地球ひろば等を活用した教職員研修をする。
- JICA等の外部団体が実施する研修の案内を積極的に行う。

3. 国際理解教育/開発教育推進のために、これから取り組みたいこと

- 学校だよりを通じて、教職員、保護者、地域へ報告する。
- 全校朝会などで国際理解について講話する。
- JICA等が行う海外研修への参加を積極的に促す。

4. 今後、JICA国内拠点や都道府県のJICAデスク(国際協力推進員)、その他外部機関と一緒に取り組みたいこと

- JICA関西の地球ひろば等を活用した教職員研修
- 国際協力推進員を招へいした出前授業の実施
- 海外の教育事情調査

5. 本研修を踏まえて行った報告会や情報共有について

- 学校だよりを通じて、保護者、地域、教職員へ報告する。
- 校内に本研修の様子の写真等を掲示する。

6. 所感・今後のビジョン

本研修を通じて、持続可能な社会の創り手となる子どもたちを育てることの重要性を再認識した。変化の激しい現代社会を生き抜く子どもたちに、知識を一時的に教え込むのではなく、自ら考え、行動し、そして学び続ける力を育む教育を推進していきたいと考えている。それは、単なる学力向上に留まらず、子どもたちが自らのアイデンティティを確立し、他者と協働しながら社会に貢献する喜びを見出せるような教育である。

そのために、私は以下のビジョンに基づいた教育の場を創り出していきたい。

第一に、「学び続ける、磨き続ける人」を育む教育である。私は、子どもたちが生涯にわたって学び続ける意欲を持ち続けられるような教育の場を作りたいと強く願っている。その鍵となるのが、読書と対話だ。読書は、時代を超えた先人の知恵や思想に触れる機会を与え、多様な価値観を理解する土壌を育む。物語の登場人物の心情に深く寄り添うことは、他者への共感力を養うことにもつながる。また、対話は、自分の考えを言葉にする力を養うだけでなく、他者の多様な視点に触れることで、自己の考えをより深く掘り下げ、多角的に物事を捉える力を育む重要なプロセスである。読書と対話を通じて、子どもたちは自らのアイデンティティを形成し、社会の一員としての自覚を高めていくことができる。

第二に、「主体的・対話的で深い学び」を追求し続ける教育である。教員は、子どもたちの興味・関心を引き出し、自ら学びに向かう姿勢を促すファシリテーターとしての役割を果たすべきである。私は、教員一人ひとりがこの「主体的・対話的で深い学び」の視点を常に持ち、日々の授業を改善し続ける文化を醸成していきたい。子どもたちが問いを立て、議論を交わし、探究する過程そのものを大切にする教育だ。このような学びの場は、子どもたちが知識を単に暗記するのではなく、それを活用して現実世界の問題を解決する力を育む。

そして、こうした教育を推進していくために、私自身もまた、学び続けていきたいと考えている。研修会などに積極的に参加し、国内外の先進的な教育事例から学び続けることで、自らを常にアップデートしていきたい。子どもたちに「学び続けること」の重要性を伝えるには、まず私たち教育者自身がその姿を示すことが不可欠だからだ。

氏名	所属	職名	担当業務
北谷 晃久	大阪市教育委員会事務局指導部	指導主事	第2教育ブロックグループ担当

1. 研修を通して考えた「今この時代に、学校教育において国際理解教育/開発教育を推進する意味や重要性」

次期教育振興基本計画について(答申)(令和5年3月 中央教育審議会)において、次期計画のコンセプトとして「持続可能な社会の創り手の育成」及び「日本社会に根差したウェルビーイングの向上」を掲げ、5つの基本的方針と16の教育政策の目標、基本施策及び指標を示している。その中で、「グローバル化する社会の持続的な発展に向けて学び続ける人材の育成」、「誰一人取り残さず、すべての人の可能性を引き出す共生社会の実現に向けた教育の推進」において、国際理解教育/開発教育に関わる内容が明確に示されており、今後の教育の方向性を示す重要な示唆となっている。

また、大阪市においては、外国につながる児童生徒数は増加しており、令和5年度は、約4400名であり、今後増加が見込まれている。担当校においても、日本語指導の拠点校や、国際クラブ実践校等、今後もより一層の国際理解教育/開発教育を推進していくことが求められる。

一方で、本研修を通して、パプアニューギニアにおける実情を知ることができた。教育現場における学校環境の実情や学習内容、教職員の意識、国の教育ビジョンや教育改革など。日本のODAやJICAによる支援の実情。人々の生活事情やワントクといった考え方。様々な実情を知ること、多角的に捉えることができ、あらためて学校教育のあり方について考える機会となった。

私たちの生活の中では、まだまだ多くの偏見や差別が存在しているのが現状であり、辛い思いをしている人が多く存在する。しかし、それを乗り越え、それらを正し、共に生きていくことが求められる。子どもたちに知識・技能だけでなく、感覚や態度を身につけていくことで、将来を担うリーダーと成長することを目指していくことが、学校教育においてできることではないだろうか。そのために我々教師が、国際理解教育/開発教育を推進することの意義について改めて考えていく必要があると強く考える。

また、パプアニューギニアの人々のワントクという仲間意識や帰属意識、自身のアイデンティティの強さにはとても驚き、あらためて自分のマインドセットが偏っていることに気づききっかけとなった。お互いを知り、理解し、尊重する。このような経験を教員にも子どもにも作っていきたい。

2. これからの学校経営方針やビジョンに国際理解教育/開発教育をどのように統合できるか。また自治体が設置している教育基本計画や方針の達成に向けて、国際理解教育/開発教育がどのように貢献できるか。

①学校経営方針・ビジョンにおいて、国際理解教育/開発教育をどのように位置付けるか。

- 「大阪市教育振興基本計画」では、基本理念として「すべての子どもが心豊かに力強く生き抜き未来を切り拓く力を備え、健やかに成長し、自立した個人として自己を確立すること」や、「グローバルが進展した世界において、多様な人々と協働しながら持続可能な社会を創造し、その担い手となること」を目指すことを基本理念としている。また、「①安全・安心な教育の推進」、「②未来を切り拓く学力・体力の向上」、「③学びを支える教育環境の充実」の3つを最重要目標としている。国際理解教育/開発教育は、「①安全・安心な教育の推進」の基本的な方向2「豊かな心の育成」の中の「多様な価値観や文化を持つ子ども同士が互いの違いを認め合い、高め合える多文化共生教育の推進」に該当し、大阪市全体で取り組んでいくべき内容である。

(実践例:大阪市立A小学校)

○学校教育目標

- ・みんながそれぞれの個性と感性を磨く中で
- ・なりたい自分となれる自分を拡大し
- ・未来の共生社会を担う力を育む

○目指す学校像

- ・関係機関の持つ力をフルに使って、子どもや家庭の自立を図る人権・福祉の充実した学校
- ・地域にあるあらゆる資源を活用し、多文化共生の町づくりに資する学校

②学校経営目標やビジョンを達成するための国際理解教育/開発教育の取り組み(行事・授業・課外活動など)

●国際クラブの継続実施とさらなる深化と、各地域での交流行事の実施。

- ・昭和23年、「府知事覚書」が交わされ、大阪府内の公立小中学校に民族学級が設置および、課外時間に韓国・朝鮮語、歴史、文化等の学習が開始。
- ・平成4年、「民族クラブ技術指導者招聘事業」を開始。
 - 平成19年、「国際理解教育推進事業」として、民族クラブ・国際理解クラブの実施。
- ・平成29年、国際クラブに統一し、韓国・朝鮮や中国だけでなく、フィリピン・ペルーなど学校の実態に合った、多様な学びの機会を設定。

●大阪市小学校教育研究会国際理解教育部を中心に、以下の3つの部会に分かれて研究活動を推進する。

①多文化共生部会

- 自文化を基礎として地域の仲間や異なる文化背景を持つ仲間と共に、学んだことや自分の考えを発信できる子どもを育てる。

②地球の未来部会

- 地球上の様々な問題と、自分と世界とのつながりに関心をもち、地球の未来について自分なりの考えを育てる子どもを育てる。

③外国語活動部会

- 人とのつながりを大切に、外国語を使ってお互いの思いや考えを伝え合い、積極的にコミュニケーションを図る子どもを育てる。

●大阪市教育委員会事務局指導部教育活動支援担当人権・国際理解教育グループによる、外国につながる児童生徒の受け入れ・共生のための教育推進事業の推進。

- ・大阪市内の4カ所に共生支援拠点を設置
- ・日本語指導が必要な子どもの教育センター校を配置。現在は17校。
- ・多文化共生教育相談ルームの設置。
- ・キャリア支援コーディネーターと未来共生教育統括コーディネーターを全共生支援拠点に各1名ずつ配置。

③国際理解教育/開発教育を継続的に推進するための学校運営や教職員育成・研修等(次の世代にどのようにバトンを繋ぐか?)という視点も含めて)

- 上記に示している、大阪市の推進事業の継続実施と諸機関との連携。
- 所属ブロック内で、本研修での学びを報告する。
- 学校訪問における、担当校の校長へ本研修での学びを踏まえて提言する。
- 研究会(大阪教育大学大学院出身者の研究会)で情報発信をする。

3. 国際理解教育/開発教育推進のために、これから取り組みたいこと

- 大阪市教育委員会事務局内での、指導主事対象の伝達講習をする。その中で、パプアニューギニアの学校教育や、JICAの取り組みなど、本研修で学んだことを報告する。
- 国際理解尺度(IUS2000)の活用(国際理解教育の効果を検討するための尺度であり、先行研究で信頼性・妥当性がとれたもの)による実態調査をする。
- 担当校において、パプアニューギニアとオンラインでつなぎ、国際理解教育/開発教育の推進を図る。

4. 今後、JICA国内拠点や都道府県のJICAデスク(国際協力推進員)、その他外部機関と一緒に取り組みたいこと

- JICA関西と連携し、本研修の学びを還元する。
- 日本国際理解教育学会での自由研究発表(第35回研究大会)。
- 共同研究「新しい時代に求められるスクールリーダーの資質・能力は?」(新しい時代の教育に求められる資質・能力について実践研究を行っている【書籍化】。64の資質・能力を提案し、身に付けたい資質・能力や今後のアクションプランなどを考えていくワークショップを実施している)を、JICAの職員の方々と一緒に考えていく研修会を実施する。

5. 本研修を踏まえて行った報告会や情報共有について

- 教育委員会事務局指導部同ブロック内において、教師海外研修(行政コース)の報告を行う。
パプアニューギニアの紹介、経済協力、国際理解教育の推進に向けて、研修での学び、大阪・関西万博招待事業など

6. 所感・今後のビジョン

現在、本市においても、外国にルールを持つ子どもが増加しており、お互いの文化や価値観を理解し、共に生きる力を育む必要がある。そのためにも、国際理解教育を通して、多文化共生の視点を持ち、世界の課題を自分ごととして考えて行動できる子どもの育成を目指していくことが求められる。

今回は、教員海外研修という、とても貴重な機会を得ることができ、今後どうあるべきかを考える大きな機会となった。研修を通して、発展途上国の状況や教育の実態について、リアルに知ることができたからこそ、目の前の状況を客観視するきっかけとなった。また、指導主事という立場だからこそ、一人でも多くの方々に学びを伝えながら、今後の国際理解教育を推進していく存在になると考える。

そして、本研修に参加できたからこそ貴重なつながりが生まれ、新たな実践につなげていくことができると考える。日本全国の先生と出会い、バプアニューギニアのJICAの方ともつながることができた。また、大阪市では大阪・関西万博の招待事業でソゲリ小学校と大阪市内の小学校との交流も生まれている。こういった横のつながりを今後も大切に、指導主事としてファシリテートしていく存在になる。そのきっかけがこの研修にはあったと確信している。

子どもたちの目の輝き、大人が子どもにかける想いは、日本もバプアニューギニアも同様であり、本研修を通して教育の可能性を再認識できた。素晴らしい機会を与えていただき感謝しかない。

氏名	所属	職名	担当業務
平田 俊彦	広島県立芦品まなび学園高等学校	教頭	

1. 研修を通して考えた「今この時代に、学校教育において国際理解教育/開発教育を推進する意味や重要性」

パプアニューギニアは、800以上の言語と多様な民族・文化を有する、世界でも類を見ない多文化社会である。今回の研修では、JICA パプアニューギニア事務所、在パプアニューギニア日本大使館、国立教育メディアセンター、教員養成校、ソゲリ小学校、ソゲリ高校など、多くの教育関係機関の皆様と対話を重ね、現地の教育・文化・社会の実情を深く学ぶ貴重な機会を得た。そのなかで最も印象深かったのは、「異なること」が決して“壁”ではなく、むしろ“学びの契機”となり得るという気づきである。他者との違いを理解し、それを受け入れながら新たな視点を獲得する経験は、まさに国際理解教育／開発教育の根幹をなす。現地での交流を通じて、「他者と共に生きる力」を育むことの本質的な意義を実感した。

さらに、日本から見た「開発」と、現地の人々が願う「発展」や「幸福感」との間にズレがあることにも気づかされた。インフラや教育制度の整備は十分とは言えない一方で、家族や地域とのつながりを重視する文化や、学びに主体的に向かう子どもたちの姿に触れ、「豊かさ」や「幸せ」の定義そのものを根底から問い直すこととなった。例えば、Wantok (ワントク) という考え方——「one talk=同じ言語を話す者」を意味し、同じ言語・部族・出身地域の人々との強いつながりを重視する部族社会の価値観——は、人と人との深いつながりの重要性をあらためて教えてくれるものであった。

このような学びは、生徒たちにも「一方的な価値観や先入観」にとらわれず、多面的・相対的に世界を見る態度を育てるうえで、大きな示唆を与えるものである。

パプアニューギニアの自然環境も極めて豊かで、多様な生態系や天然資源に恵まれている。しかし一方で、気候変動、森林伐採、鉱山開発、ごみ問題といった深刻な環境課題にも直面している。そうした状況にあっても、現地の人々は自然と共に生きるための知恵や文化を大切に守り継いでいた。その姿からは、「持続可能な開発」や「地球市民としての責任」について、あらためて深く考えるきっかけを得ることができた。学校現場でも、生徒たちが自らの生活や選択が「地球規模の課題」とどうつながっているのかを理解し、それを行動へと結びつけていけるような力を育む必要がある。

教育の面でも、パプアニューギニアの現状は日本とは大きく異なっていた。物的資源に乏しい中で、教師たちは創意工夫を凝らし、海外協力隊の支援を受けながら授業を展開していた。子どもたちは目を輝かせ、学ぶ意欲に満ちていた。教育とは、制度や設備ではなく、人の力によって支えられ、成り立つものであるという原点に立ち返らせてくれる光景であった。こうした経験は、日本の教育のあり方を相対的に見直す契機となったと同時に、教師自身が「共に学び、共に考える国際理解教育/開発教育」の実践者として意識を深める貴重な転機となった。

また、異なる歴史的・文化的背景をもつ人々との対話や交流、そして時に生じる誤解や戸惑いの経験を通して、真の国際理解や共生のためには「知識」だけでなく、「態度」や「関係性の構築」が欠かせないことを、身をもって実感した。こうした学びは、学校教育においても重要な資源となる。他者と真摯に向き合い、異なる価値観を尊重しながら、「平和的に共存していく力」を子どもたちに育てていく必要がある。

今回のパプアニューギニアでの研修で得た気づきや学びは、単なる異文化理解を超え、自分自身の暮らしや社会、教育のあり方を映し出す鏡となった。今という不確実な時代において、学校教育に求められているのは、単なる知識の伝達ではなく、世界とつながりながら「主体的に生きる力」を育むことにある。

国際理解教育/開発教育を通じて、「世界の課題を自分のこととして捉え、行動できる力」を育てることが、これからの社会を生きる子どもたちにとって欠かせないと、あらためて確信している。

2. これからの学校経営方針やビジョンに国際理解教育/開発教育をどのように統合できるか。また自治体が設置している教育基本計画や方針の達成に向けて、国際理解教育/開発教育がどのように貢献できるか。

①学校経営方針・ビジョンにおいて、国際理解教育/開発教育をどのように位置付けるか。

目標を自ら定め、その達成に向け、自分を律して粘り強く努力し、社会に貢献できる生徒の育成」を教育目標に掲げており、その実現には、「グローバルな視野」と「多様性への理解」を基盤とした人間形成が不可欠である。国際理解教育/開発教育は、こうした教育目標を具体化するうえで重要な柱であり、生徒が世界と自分のつながりを認識し、異なる文化や課題に関心をもち、「共に生きる力」を育むための有効な教育的アプローチである。

パプアニューギニアでの海外研修では、800以上の言語と文化が共存する社会に身を置き、その多様性に触れる中で、人々が互いの違いを受け入れながら暮らしている様子を知り、多文化共生のリアリティとその価値を実感することができた。この学びを通じて、教育は国家や文化の枠を超えて「つながりを築く力」を育てるものであることを再確認した。

また、広島県教育委員会の教育基本計画においても、「平和で持続可能な社会の実現に貢献する人材の育成」が重点目標とされており、本校における国際理解教育/開発教育の推進は、この理念と深く結びつくものである。

今後は、全教育活動の中に国際的視点を組み込み、以下のような教育像の実現を目指していく。

【生徒像】：多様な価値観を理解し、他者と協働できるグローバルな視野を持つ生徒

【教員像】：社会課題や国際的テーマを積極的に授業に取り入れる教育実践者

【学校像】：地域に根ざしつつ、世界とつながる学びの場として機能する学校

したがって、国際理解教育/開発教育は、本校の教育目標と教育実践をつなぐ中核的な視座として、学校経営の基盤に据えるべき重要な教育的理念として位置付ける。

②学校経営目標やビジョンを達成するための国際理解教育/開発教育の取り組み(行事・授業・課外活動など)

【授業・探究活動】

総合的な探究の時間等を中心に、SDGsや貧困、気候変動、開発協力などを扱う単元の設置を検討し、「課題解決型の学び」を推進する。他教科(国語・英語・家庭科など)とも連携し、世界の文化・暮らしに触れる横断的な学習を行う。

【交流活動】

本研修に参加した先生方はもとよりJICA関係者やGiFTの皆様と今後もつながり、国際理解教育/開発教育の必要性を発信していく。

【教職員研修・校内体制】

教員向けに今回の研修報告を兼ねた国際理解教育に係る研修を実施し、全教職員で共通理解を図る。教育活動全体に国際的視点を組み込むための校内組織や推進体制を整備する。

これらの取り組みを通じて、生徒の視野を世界に広げ、学校全体で「社会に貢献できる人材の育成」を実現していく。

③国際理解教育/開発教育を継続的に推進するための学校運営や教職員育成・研修等(次の世代にどのようにバトンを繋ぐか?という視点も含めて)

- 国際理解教育/開発教育を学校経営計画や学校評価に明記し、継続的な取組として制度化を検討する。
- 年度ごとの教育課程編成時に、全教科・領域に国際的視点を取り入れる機会を検討する。
- 外部講師や専門機関(JICA関係・大学・NGO等)と連携した研修を定期的実施し、教職員の国際感覚や知見を高める。
- 海外研修や視察の成果を、報告会や校内資料として共有し、「個人の経験」を「学校の資産」として蓄積・活用する。

3. 国際理解教育/開発教育推進のために、これから取り組みたいこと

- 本研修での学びを、教職員に報告し、多文化共生や国際理解教育/開発教育の視点を持つことの重要性を伝えるとともに教師海外研修の魅力を発信する。
- 地理探究や総合的な探究の時間等で、教科担任と協働して授業実践をする。
- 広島県高等学校教育研究会国際教育部会等を通して、今回の学びを報告、共有する。

4. 今後、JICA国内拠点や都道府県のJICAデスク(国際協力推進員)、その他外部機関と一緒に取り組みたいこと

- JICA海外協力隊経験者・専門家を招いた授業や講演会の開催(JICA中国/広島県JICAデスク)
- グローバル人材育成を目的とした交流プログラムの推進(JICA中国)
- 教職員向けの国際理解・開発教育研修の共同開催(広島県JICAデスク)

5. 本研修を踏まえて行った報告会や情報共有について

11月12日(水)、午前部・午後部・夜間部でそれぞれ45分の授業を3クール実施し、本校の全校生徒および教職員を対象に、「バブアニューギニアの学びを学校へー生きた国際理解教育の実践ー」と題した授業を行った。

また、12月11日(木)に開催された広島県高等学校教育研究会国際教育部会の研究大会において、研修報告のダイアログセッションにて、今回の学びについて報告・共有を行った。

6. 所感・今後のビジョン

JICA教師海外研修(教育行政コース)を通じて、パプアニューギニアの多様な文化や価値観に触れ、「持続可能な社会の創り手」を育てる教育の必要性をあらためて実感した。学校管理職として、まずは学校教育の根幹である「授業」を大切に、生徒たちが自ら課題を見つけ、仲間と協働しながら「未来を切り拓く力」を育む学びを推進していきたい。

そのために、自らも授業づくりに積極的に取り組み、その姿勢を教職員と共有することで、学校全体に「学び続ける文化」を根づかせたいと考えている。また、今回の研修で得た気づきを生かし、教職員が安心して挑戦できる環境を整え、互いの実践を学び合える場を意図的に設けていきたい。

さらに、学校の取組を地域社会と結びつけることも学校管理職の重要な役割と捉えている。公開授業や報告会を開催し、地域の方々と情報を共有することで、学校と地域が共に学び合い、未来を描いていける関係づくりを進めていきたい。

また、教育者としての可能性の一つとして、もし機会があれば海外協力隊などを通じて開発途上国の教育現場に関わり、その経験を再び学校現場に還元したいとも考えている。

生徒たちに「学びを社会に生かす姿」を実際に示すことで、未来に挑戦する意欲を育てたい。

今回の研修で得た経験を礎に、学校管理職として「学校」と「地域」をつなぐリーダーシップを発揮しつつ、教育者として広い視野を持ちながら、「持続可能な社会の担い手」を育む教育を力強く推進していく決意である。



全校生徒への授業



授業スライド

氏名	所属	職名	担当業務
小川 隆弘	宮崎第一高校	主幹教諭	進学指導部長

1. 研修を通して考えた「今この時代に、学校教育において国際理解教育/開発教育を推進する意味や重要性」

グローバル化は今後一層進展していくと考えられ、多文化社会や共生社会の実現は日本においてもますます重要になっていくだろう。したがって、学校教育においても国際理解教育/開発教育は、単なる知識としてではなく、地域社会や国際社会の一員として、全員が継続的な行動につなげられるよう活発な取り組みが求められる。とりわけ、排外的なムードが高まっている現在、価値観や意見が異なる他者とのように対話を続けていくのかという実践的な視点が大切になる。

2. これからの学校経営方針やビジョンに国際理解教育/開発教育をどのように統合できるか。また自治体が設置している教育基本計画や方針の達成に向けて、国際理解教育/開発教育がどのように貢献できるか。

①学校経営方針・ビジョンにおいて、国際理解教育/開発教育をどのように位置付けるか。

- (正解のある学びからときに離れ、現実の国際社会問題に対して、どのようにアプローチしていくべきか生徒と一緒に模索していくという意味で)学び続ける教員集団を作り、社会貢献を果たしていくための「学びの場」の一つに位置付ける。

②学校経営目標やビジョンを達成するための国際理解教育/開発教育の取り組み(行事・授業・課外活動など)

- (対生徒という点では)主に「総合的な探究の時間」を利用し、多文化社会や共生社会を実現させるため、何が課題で、何が求められるか、継続的で実践的な探究を進めていく。このとき、社会を構成する一員として当事者意識を持って取り組んでいけるよう、自分の足元、つまり多文化社会や共生社会を実現するうえで自分の地域社会に存在している問題に目を向けていくことを意識する。また、継続的にそうした社会の実現に取り組んでいくという視点を重視するため、必ずしも何らかの成果物を作ることをゴールとするのではなく、多文化社会や共生社会を作っていくアクターに成長していくことを達成すべきビジョンとする。
- 実際に「現場を見る、聞く、対話する」という学びが体験できる機会を生むため、国内外のスタディーツアーを企画する。
- 上記の取り組みの発表報告会などでは、できるだけ保護者の方も参加できるような機会を作り、保護者の方々を巻き込むこと、さらに国際理解教育/開発教育の裾野を拡大していく。
- 他校との連携を推進していく。国際理解教育/開発教育の取り組みは教科指導などに比べ各校の独自性や強みに差が生まれやすいため、互いの長所を組み合わせ、進展させていきたい。

③国際理解教育/開発教育を継続的に推進するための学校運営や教職員育成・研修等(次の世代にどのようにバトンを繋ぐか?)という視点も含めて)

- 統一された基準や評価に達することを過度に求めるのではなく、学び続ける教員たちによるオリジナルで“温度差”のある国際理解教育/開発教育を進めてもらい、それらの中間報告や最終報告などの会を通じて「学び合い」の場を生み出し、それぞれの国際理解教育/開発教育のブラッシュアップの機会とする。

3. 国際理解教育/開発教育推進のために、これから取り組みたいこと

(上記項目2の②および③の内容と重なるが)

- スタディーツアーの企画
- 他校との連携や保護者を巻き込んだ国際理解教育/開発教育の推進
- 「学び合う」ことができる国際理解教育/開発教育の職員研修を運営

4. 今後、JICA国内拠点や都道府県のJICAデスク(国際協力推進員)、その他外部機関と一緒に取り組みたいこと

- JICA九州の方にご協力いただき、本校で出前講義(教員対象バージョン、生徒対象バージョンなど)
- 宮崎県JICAデスクを中心として、国際理解教育/開発教育に関心がある宮崎県内の教育関係者と定期的なディスカッション
- (ご要望があれば) JICAの活動に興味のある方々に、研修に参加した者として講演

5. 本研修を踏まえて行った報告会や情報共有について

【研修直後】

パプアニューギニアでの研修について、授業に行っている全クラス(高校生)に計3回、撮影した写真を用いながら以下の項目を中心に話した。

- ①パプアニューギニアの概要(地理・文化・政治・経済など)
- ②パプアニューギニアと日本の関係についてⅠ(第二次世界大戦のできごとを中心に)
- ③パプアニューギニアと日本の関係についてⅡ(現在の経済交流や民間交流、観光を中心に)
- ④ODAについて
- ⑤パプアニューギニアにおけるODAの活用について
- ⑥パプアニューギニアでの研修内容(日程順に、各研修内容についての感想)
- ⑦質疑応答

【今後】

現在、上記項目3にもあげた「学び合うことができる国際理解教育/開発教育の職員研修を運営」していくために、校長等と協議中。10月下旬には第1回の「学び合う」職員研修を実施する予定。ここで、パプアニューギニアでの研修を報告するとともに、国際理解教育や開発教育を進めていくための本校の方向性を提案していきたい。

6. 所感・今後のビジョン

可能な限り実践的でありたいと考えている。できるだけ自分が国際理解教育/開発教育の frontline にいて、自ら学び、体験し、それを同僚の先生方や生徒に伝えていきたい。今回のように海外での支援の現場に立つと毎回感じることがある。それは、現地の方たちに何かを与えているという感覚より、現地の方たちから何かをもらっているという感覚だ。それは「元気」であったり、学びにつながる「気づき」であったりするが、さらにこの感覚は、それまでほとんど意識していなかった「遠くの人々とも自分につながっている」ということをあらためて認識させてくれる。国際理解教育/開発教育は、おそらくこうした感覚、「遠くの誰かとつながっている」、「自分の行動は世界の何かに影響を与えることができる」という感覚を育むための教育でもあるだろう。

私は、生徒が実社会と接点を持ちながら体験的な学びになるよう国際理解教育/開発教育を進め、同僚の先生方とも実践を共有し、多文化共生社会の実現に寄与していきたい。

氏名	所属	職名	担当業務
山崎 香織	宮崎県立日南くろしお支援学校	主幹教諭	高等部主事

1. 研修を通して考えた「今の時代に、学校教育において国際理解教育/開発教育を推進する意味や重要性」

このたび、JICA教師海外研修(教育行政コース)に参加し、パプアニューギニアを訪問する貴重な経験を得た。短期間ではあったが、現地の小学校を含め様々な場所を視察し、教育現場から社会基盤に至る幅広い学びを得ることができた。この経験を踏まえ、特別支援学校における国際理解教育/開発教育の意義について考えた。

パプアニューギニアは800を超える言語と多様な民族・文化を抱える国であり、基本的には多様性を認め合う社会が形成されている。訪問したソゲリ小学校でも、多くの子どもたちが一緒に意欲的に学習に取り組む姿が見られた。特別支援教育においても、子ども一人一人の特性や学び方の違いを理解し、その子にあった手立てを工夫することが求められている。多文化共生の姿勢と、特別支援教育で大切にしている「一人一人の尊重」は重なるものだと感じた。国際理解教育は、様々な意味においての「多様性」についても感じることができ、それを児童生徒が体験的に理解できる貴重な機会となる。

開発教育においては相互の知恵や強みを活かすパートナーシップが重視されている。パプアニューギニアで活躍していた協力隊員が算数の授業の中でペットボトルキャップを教材として使用し、掛け算の考え方について子どもたちに分かりやすく説明していた。子どもの実態に応じて、既存の教材を工夫したり、生活に密着した素材を使ったりする発想は特別支援教育に通じるものであり、日本の現場でも実際に指導・支援に活かされている。こうした学びは、特別支援教育において「教える側」「学ぶ側」という固定的な関係を越え、共に成長する教育を実践できると考える。

また、職業教育や社会参加の機会を広げる取り組みは、特別支援教育とも直結している。下水処理場を視察した際、パプアニューギニアの大きな気質の人々と共に施設を維持することの難しさを感じ、将来を見据えた幼児期からの教育の重要性を強く感じた。SDGsの「質の高い教育をみんなに」「働きがいも経済成長も」といった目標を、子どもたちの日常生活や将来の自立に直結するテーマとして取り入れることが可能であると考えた。

2. これからの学校経営方針やビジョンに国際理解教育/開発教育をどのように統合できるか。また自治体が設置している教育基本計画や方針の達成に向けて、国際理解教育/開発教育がどのように貢献できるか。

① 学校経営方針・ビジョンにおいて、国際理解教育/開発教育をどのように位置付けるか。

【重点目標】

- 児童生徒一人一人が「陽」として主体的に活動できる教育活動の展開
 - ・世界の多様な文化や価値観に触れる学びを通じて、「自分も社会の一員として大切な存在である」という自己肯定感を高める。
 - ・障がいの有無に関わらず、一人一人が持つ力を尊重し合う経験を積むことで、主体的な参加や役割意識を育む。
- 卒業を見据えた進路指導の充実
 - ・国際的な視点から「多様性の中で生きる力」を学ぶことで、卒業後の地域社会や職場での人間関係に活かす。
 - ・パプアニューギニアなど諸外国における障害理解や社会参加の事例を紹介し、自らの進路や生き方を考えるヒントとする。

- 教師一人一人が「陽」として働くことができる職場づくり
 - ・異文化理解を通じて教職員同士が柔軟に学び合い、協働的で前向きな職場風土をつくる。
 - ・教師自身が余裕をもって学び続けられる環境を整えることは、児童生徒の教育活動の充実に直結するという意識を共有し、持続可能な学校づくりを進める。

②学校経営目標やビジョンを達成するための国際理解教育/開発教育の取り組み(行事・授業・課外活動など)

- ICTを活用し、海外の学校や子どもたちと交流(ビデオ通話・協働作品制作)。
- 海外の職業や働き方を紹介し「地域で働くこと」と「世界とつながること」を結びつける。
- 教師間で国際理解教育の授業実践を共有、教材を開発し、合理的で創造的な授業法を研究する。

③国際理解教育/開発教育を継続的に推進するための学校運営や教職員育成・研修等(次の世代にどのようにバトンを繋ぐか?という視点も含めて)

- JICA、地域の外国人コミュニティ、海外協力経験者との連携を学校行事や授業に組み込む。
- SDGsや異文化体験を生活単元学習や総合的な学習(探究)の時間に組み込む。
- 生徒作品や活動の様子を学校ホームページや掲示等で紹介し、成果の見える化を通して、保護者や地域から理解や協力を得やすくする。

3. 国際理解教育/開発教育推進のために、これから取り組みたいこと

- 職員向けに研修報告をし、同時に児童生徒向けにパプアニューギニアで経験したことをクイズ等交えて伝え、日本と海外との違いや良さについて触れ、国際理解教育のきっかけとする。
- 海外研修や海外視察に今後も参加できるように、職員へ啓発・促しをする。
- SDGsや異文化体験を組み込んだ、年間指導計画の作成。

4. 今後、JICA国内拠点や都道府県のJICAデスク(国際協力推進員)、その他外部機関と一緒に取り組みたいこと

- JICA海外協力隊員の活動について、ビデオ通話または来校依頼し、様々な経験を紹介してもらう。
- 「世界の遊び」や「パラリンピックスポーツ」の体験。
- JICA横浜・海外移住資料館作成の「学習活動の手引き」に掲載されている「移民から考えるSDGsピクトグラムづくり」を活用し、児童生徒と共に誰もがわかるコミュニケーション素材の作成に取り組む。

5. 本研修を踏まえて行った報告会や情報共有について

まだ報告会の実施には至っていないが、パプアニューギニアでの視察を通して肌で感じたこと、途上国の教育の現状、今の時代において多様性を学ぶことの重要性について、校内研修等で学びを共有できる機会をつくりたい。

6. 所感・今後のビジョン

本研修を通じ、特別支援教育と国際理解教育はいずれも「多様な背景をもつ人が共に生きる力を育む」という共通の目的を持つことを実感した。パプアニューギニアでの学校や社会インフラの視察は、限られた環境の中でも創意工夫しながら未来を切り拓く人々の姿に学ぶ貴重な経験となった。

今後、特別支援学校でも海外にルーツをもつ児童生徒は増えていくと考えられるが、一方で教職員の働き方の見直しにより研修機会や業務は制限を受け、大きな変化をすぐに実現することは難しい現状にある。

だからこそ、写真や映像を使った身近な国際理解教育、生活単元学習や総合的な学習(探究)の時間にSDGsを組み込む工夫、教職員間の小規模な研修など、日常に無理なく取り入れられる実践を重ねていきたい。

持続可能な社会の創り手を育てる教育者として、子どもたちが「自分」と「世界」をつなぎ、多様性を価値として受け止められる場を築いていきたい。



ファシリテーター所感

ファシリテーター所感

JICA教師海外研修(教育行政コース)は、スクールリーダーとして学校経営に関わる方、教育行政で学校教育のマネジメントに関わる方を対象とした研修です。授業で国際理解教育/開発教育を実施することだけではなく、学校全体として継続的に推進する体制づくりなど、スクールリーダーの皆さんのこれからの取り組みの後押しとなるよう、ファシリテーターとして、以下の視点を大切にしながら研修の運営に関わりました。

- 参加者が国際協力現場を訪問することにより、国際理解教育/開発教育の重要性を自ら体感し、個々の教育観や育成すべき児童・生徒像と国際理解教育/開発教育を繋げる機会にすること。
- 参加者が、国際理解教育/開発教育の推進に向けた短期、中期、長期的な戦略や具体的なアイデアをもって研修を終えること。
- 本研修の終了後に、参加者がそれぞれの地域や校種、立場等を踏まえつつ、学校内で、地域内で国際理解教育/開発教育を推進し広めるための中核的人物となっていくこと。

国際協力・国際理解に関する学びはSDGsと同じく、児童・生徒が授業で「知る」ことだけではなく、世界で起きていることが自分たちとどのようにつながっているのか、そこから何を感じ、自分たちは何ができるのか、どうしたら「誰も取り残さない」社会を実現できるのかという、理念や視点を問う一連の学びの活動です。

この研修の参加者層を踏まえたとき重要になってくるのは、学習活動に国際理解や国際協力の視点や体験を授業に取り入れるということだけではなく、学校教育全体を俯瞰した形でどのように日々の教育活動に組み入れるか、変わりゆく社会・世界に合わせて子どもたちの学びや視野をどのように広げていくかといった、ビジョンやマネジメントに関わるものです。このことから、ファシリテーターとして事前研修から海外研修、事後研修を通じて、参加者が国際理科教育/開発教育推進の担い手意識を持ったリーダーシップの視点や、地域・校内で推進の取り組みを実現するためのマネジメントの視点、あるいは行政の立場としてどのような制度的支援ができるかという視点からの問いかけをしました。その中で、どのように国際理解や国際協力の視点を当たり前化できるのかを一緒に模索していきました。

事前研修ではそれぞれの参加した動機や国際理解教育・開発教育を推進する意味について共有する時間を設けました。

「協力隊として海外に住んでいた。その後教員になってから開発教育の大切さを広めるために活動してきたが、様々な制約や優先事項の関係で思うように進められていないため、ヒントを得るために参加した。」

「学校現場には外国籍の子どもが多い。多様化していく中で、国際理解の重要性を感じている。教員含めて楽しく学ぶ機会が必要である。」

「万博が世間の注目を集める中で、世界について学ぶ良い機会になっている。世界が支え合えないといけないからこそ、国際理解教育や開発教育を学ぶ必要がある。」

「総合的な探究の時間で国際理解教育をやっているが、ある程度の期間学んで、成果物を作って終わり、という状況になってしまう。まとめるだけではない学びをどう作っていくべきか考えたい。」

一人一人の参加目的や、国際理解教育/開発教育の重要性の感じ方も異なるが故に、対話を通してそれぞれの目線を合わせ、チームとして学びあう関係性を作ることに専念しました。

海外研修ではパプアニューギニアに訪問し、様々な訪問先で出会う人たちとの対話を経て、日々振り返りを行いながら、それぞれの感じたことや考えていることを共有する時間を取ることで、参加者一人一人の推進者としての自覚も増していきました。

「どこを訪問してもJICAの凄さを感じ、感謝の気持ちでいっぱい。パプアニューギニアで出会った子どもたちの瞳の輝きがいちばん安心した。みんな違ってみんないい、というのを校長として伝えてきたが、今回パプアニューギニアで得たことは「違いを楽しむ」という言葉だった」

「様々な場所を訪問してきたことで、教育の大切さをあらためて感じた。国を作るにも、地域を作るにも教育は大切で、学校は地域を作っていけるんだと実感した。学校が落ち着いていくと、家庭も協力的になり、地域も変わっていきける。」

「最終処分場や学校などの訪問や交流を通して見たこと、感じたことからまとまらない、気になる、モヤモヤが生まれている。答えのない中でモヤモヤを言語化する、考え続けるということが国際理解教育の価値ではないか」

このような気づきや思いが共有されていきました。

一方で、個々の充実した経験や認識したその重要性を踏まえて、国際理解教育/開発教育の推進のために、周囲を巻き込んでいくにはどうしたらいいかというのは別の段階の話です。これまでの教師海外研修でも大きな課題になるのは、それぞれのフィールドでどのように実践を進められるのか、何をしたらいいのかということでした。こうした現実にあるギャップを埋めるために、どのように仲間をつくり、どのようにつながり、どのような戦略を持って国際理解教育/開発教育の推進に向けた一歩を踏み出せるのか、組織の変化に焦点を当てた戦略づくりだけではなく、その土台となる学校のあり方について考える時間も持ちました。

「教員は普段の環境を考えると、外との関わりが限定的になると想像力が欠如してしまう。だからこそ自ら体験するような機会や、ロールモデルを知ることによって様々な生き方や課題へのアプローチがあるということを理解していくための研修などが大切ではないか。」

「学力など日本の方が優れている面もある反面、ウェルビーイングや学校の基盤となる土台が揺らいでいることもある。知だけではなく、徳の部分を重視した取り組みがいくつか挙げられるが、それを単発ではなくどのように包括的につなげるか。」

「先生や子どもたちの居場所としての学校はどうあるべきか、国際理解はその推進に向けてどのように貢献できるのか。取り組みだけではなく、物、金、システムをどのように動員するか、学校の目標にインクルージョンやウェルビーイングをどのように設定するのかということにもつながる。」

国際理解教育/開発教育をどのように推進できるかという問いには、唯一の明確な答えはありません。しかしこの研修では、参加者は対話を通して、自分のやりたいこととできることを出し合い、どのような方法で推進できるのか、それぞれの知見を持ち寄った形でこれからのアクションやビジョンにつなげて考えを膨らませていきました。

本研修の参加者は、すでにスクールリーダー、国と学校をつなぐミドルリーダーとして活躍している方々です。それぞれが学校や地域をリードする立場となり、作りたい学校や地域のビジョンを描く時、「世界を理解し、つながり、助け合う」という視点は必ず入るものと確信しています。この研修後には、アイディアとして出た地域を超えた共同研修がすでに実現しています。管理職や教育行政の担当者が自ら世界に出ていき、リアルを体感し、たくさんの気づきと問いを持ち帰る。それぞれが専門的に「教える」必要はなく、外に出て気づいたこと、問いを皆で共有しながら、仲間と一緒に主体的に考え、学び、何か実行してみる。帰国後のアクションを見ていると、国際理解教育や開発教育において最も大事なものは、「知ろう」「学ぼう」という姿勢と、それを共有できる仲間づくりであると感じました。

国際理解/開発教育を推進するための指針として、ユネスコは2023年に「平和と人権、持続可能な開発のための教育」に関する勧告を採択し、今年は国際実施ガイドが公表されました。また、教育の質的な変革に向けては、スクールリーダーや教育行政にいるミドルリーダーの役割が非常に重要になってくると示しています。その意味において、長きにわたり実施されてきたJICA教師海外研修(教育行政コース)は、ユネスコのこの政策を裏付けするものと言えるでしょう。今回、そしてこれまでに教師海外研修に参加した一人一人の姿勢や行動が組織や学校に伝わり、教員や生徒に波及し、制度的なサポートや学校全体で学び合う環境が今後さらに増えていくことを強く願っています。

一般社団法人グローバル教育推進プロジェクト (GiFT)

理事・GiFTダイバーシティファシリテーター

木村 大輔



付録

教育現場で活用できるJICAのツール

国際理解教育／開発教育プログラム

教材

世界の現状や課題、国際協力などについて理解を深め、自分たちにできることを考え行動するために、映像教材、冊子教材、マンガ教材などを作成し無料で提供しています。授業に合わせてご利用ください！

申込・問い合わせ

人気冊子は「つながる世界と日本」です！



教員向け研修

国際理解教育／開発教育に関心のある先生方を対象に、途上国を訪問する「教師海外研修」、指導案の作成・授業実践のレベルアップに取り組む「指導者研修」等があります。各国内拠点でも独自の研修を実施しています。

各研修の募集案内

研修の種類によって対象者や目的が異なります！



国際協力出前講座

派遣中・帰国後のJICA海外協力隊やJICAスタッフの講義を、対面やオンラインで聞くことができます。体験談、異文化理解、国際協力キャリア、国際協力とSDGsなど、要望に沿った内容を組み立てます。

申込・問い合わせ

対面型は国内拠点HPへ！
オンライン型はこちらから→



イベント・セミナー

地球ひろばでは毎月さまざまイベントを実施しています。オンラインセミナーでは国際理解教育／開発教育の視点から「教室と世界をつなぐヒント」を皆さんと共に探っていきます。是非お気軽にご参加ください。

スケジュール

各国内拠点の地球ひろばも拡充中です。ご来訪をお待ちしています。

イベント
セミナー情報はこちらから→



教室と世界をつなぐ！オンライン出前講座の流れ



外国につながる児童・生徒に関連する情報

11か国を対象として、各国の教育制度・学校文化に関する調査を実施し、ガイド集としてとりまとめました！日本の学校の仕組みや文化を知っているだけでなく、子ども・保護者の出自国の制度や文化を知っており対比的に説明できることが、子どもたちの就学にあたって保護者への理解の大きな手助けになります。

